

南方熊楠

「鷲石考」

（「續南方隨筆」所収・正規表現版）
藪野直史オリジナル注附

「やぶちゃん注」は「續南方隨筆」は大正一五（一九二六）年十一月に岡書院から刊行された。

以下の底本は国立国会図書館デジタルコレクションの原本画像を視認した。今回の分はここから（本文冒頭部をリンクさせた）。但し、加工データとして、サイト「私設万葉文庫」にある、電子テキスト（底本は平凡社『南方熊楠全集』第十卷（初期文集他）一九七三年刊）を使用させて戴くこととした。ここに御礼申し上げる。疑問箇所は所持する平凡社「南方熊楠選集4」の「続南方隨筆」（一九八四年刊・新字新仮名）で校合した。

注は文中及び各段落末に配した。彼の読点欠や、句点なしの読点連続には、流石に生理的に耐え切れなくなってきたので、向後、「選集」を参考に、段落・改行を追加し、句読点や記号を私が勝手に変更したり、入れたりする。漢文部（紛（まが）い物を含む）は後に推定訓読を「」で補った。なお、欧文の雑誌名や一般名詞・固有名詞等のコーテーション・マークは、縦書にすると、上手く表記されないので、省略した。また、こちらでは私の段落末の注の後を一行空けとし、私の注を読まずに、読み進められる方のために便宜を図っておいた。

本篇は今まで以上に、熊楠流の勝手な送り仮名欠損が著しい。ブログでは、その一部を、**《》**で推定の歴史的仮名遣の読みを添えたが、このPDF一括版では、私のその補填が「五月蠅い」と感じられる方も多からうからして、**《》**で挿入した部分は、基本、削除し、原型に戻した。しかし、実際に読み始められると、如何に熊楠の原文章がひどく読み難いかがお判り戴けるはずである。読みが不明・不審な箇所は、私の**ブログ・カテゴリ「南方熊楠」**で、全五回で分割したブログ版の補填読みと注をご覧になれば、恐らく、殆んど明らかになるものと思う。逆に、本本文を私の注も飛ばして読んだ場合、まず、全部を正しく読める方は極めて少ないはずである。熊楠は殆んど難読の固有名詞（地名その他）にさえルビを振っていないからである。しかも実際の底本は読点が甚だ少なく、記号の仕様も殆んどない状態で、さらに加えて厳しいものになっていることは、底本を見れば、一目瞭然なのである。

なお、「**鷲石**」は、「しうせき」（しゅうせき）で、その正体の最も有力な対象物は褐鉄鉱（リモナイト：**limonite**）**ひ、ウイキの「褐鉄鉱」**によれば、『吸着水や毛管水を含んだ針鉄鉱（ゲーサイト、 $\alpha\text{-FeOOH}$ ）または鱗鉄鉱（レピドクロサイト、 $\gamma\text{-FeOOH}$ ）の一方または両者の集合体であり、鉱物名としては褐鉄鉱は使用されていない』とあり、『天然の錆である』とあって、さらに『団塊状で内部に空洞のあるものを鳴石、壺石とい』うところある物が、以下で語られる「**鷲石**」である（空洞中には水を持っているものもある）。**壺齋散人（引地博信）氏のサイト「日本語と日本文化 壺齋閑話」の「鷲石考」**南方熊楠の**世界**」に、『鷲石にまつわる伝承はとりあえずヨーロッパに広まっている。中国には鷲石そのものの伝承はないが、それと似たような話はある。禹余糧』（うよりょう）以下の本文にも出る。歴史的仮名遣は「うよりやう」。小学館「**日本語大辞典**」によれば、『日本や中国に見られる岩石の一種。小さい石が酸化鉄と結合したもの。中に空所があって粘土を含む。

ハツタイ石、岩壺など多くの呼び名がある』とある。引用元でも以下で解説が続く『中国では、鷲石に相当する石は禹余糧と呼ばれている。むかし禹王が会稽の地で宴会を催した時、余った食料を江中に捨てたところが、それが化石となったので禹余糧と呼ばれるようになったというのである。小野蘭山によれば、『この石は「はなはだ硬く、黄黒褐色にして、打ち破れば鉄色あり。その内空虚にして、細粉満てり」というから、ヨーロッパでいう鷲石と同じなわけだが、中国人はヨーロッパ人と異なり、これを鷲と結びつけることはしなかったのである。中国人には、鷲を性と結びつけるという発想がなかったためかもしれない』。『中国人も、この石の形が母胎に子を宿すに似ているところから、これを催生安産の靈物としたが、ヨーロッパ人とは異なり、これを昔の聖人が食い残した食物と結びつけたことから、長生して仙人になれる特效薬と考えるようにもなった。また、その成分の鉄が栄養源として相当に働くことから、これに広い薬効を結びつけるようにもなった。鷲石をもつばらセックスや繁殖と結びつけたヨーロッパ人とは、アナロジーの働く範囲が多少ずれていたわけであろう』と言及されておられる。』と呼ばれているものだ。日本では孕石というものがほぼこれらに対応している。そこで熊楠はこれらの伝承に潜んでいる共通点と相違点を抽出することに切り掛かるわけだ。『ヨーロッパで鷲石と呼ばれているものは、扁平な形状の石のようなもので、内部に空洞があり、そこに小石が入っている。それが子を孕んだように見えることから、人間の出産と結び付けられるようになった。この石の正体は褐鉄鉱で、鷲が巣くうような洞窟によく見られる。そこから鷲と結びついて鷲石と呼ばれるようになり、その鷲石に、出産やそのほかの効用が結び付けられるようになったわけである』とある。以上の引用文中に出る「孕石」は、以下の南方熊楠の序文にも出るが、「はらみし」と読み、やはり、石の中に空洞部分があつて、小さな石を持っているように感じられるもので「子持ち石」とも言い、「鷲石」のように（以上の通り、壺齋散人氏は同一とされる）安産等のお守りとされた。本文でも南方熊楠が考察するように、ある形状・性質・様態に見える対象物が、異なったものであるが、やはりそうした似たものを有する全く別な対象物と強い親和性と共時性を持つと考える民俗社会の感応性、所謂、フレイザーの言うところの「類感呪術」である。

本PDF一括版は二〇二三年六月十二日に公開した。」

鷺石考 南方熊楠

鷺石考

第一 鷺石に就て

第二 禹餘糧等に就て

是は一九二三年三月十日ロンドン発行『ノーツ・エンド・キーリス』十二輯十二卷一八九頁に出た質問に對し、七月二十一日、二十八日、八月四日、十一日、十八日、二十五日の同誌上に載た熊楠の答文を、本書の爲に自ら復譯した者である。但し、大意をとる。又『性之研究』拙文「孕石のこと」より取た所もある。爰には便宜上、「鷺石に就て」・「禹餘糧等に就て」の二篇に分ち述る。

「やぶちゃん注」以上と次の「第一編 鷺石に就て」の「質問」の本文部分と「應答」一ページまでは、底本では、本文行間が他に比して有意に広いが、再現しない。なお、ここに出る *Notes and Queries* の当該年のそれは、[「Internet archive」](#)でも、[画像化が行われていない](#)（リンク先は英文 Wikisource の同誌の「Internet archive」にリンクしたリスト）ので、視認出来ない。

「孕石のこと」[サイト「私設万葉文庫」](#)にある、[電子テキスト](#)（底本は平凡社「南方熊楠全集」第三卷（雑誌論考Ⅰ）一九七一年刊）のページ・ナンバー『(497)』に、「孕石のこと」（大正九（一九二〇）年十一月・十二月発行『性之研究』第二卷第二号及び三号発表）として読める（二部構成）。」

第一編 鷺石に就て

質問 龍動 キルフレッド・ジェー・チャムバース

一六三三年附でリチャード・アンドリユースがニウキャッスル女伯に出した状は、史料手筆調査會第十三報に收め、出版された。其内に「予は、又、貴女へ、鷺石一つを送つた。是は、出産の節、腿に括り付ると、安産せしむ。」とある。此石の性質・効力に付て、一層、詳知したし。

「やぶちゃん注」：「龍動」ロンドン。」

應答 日本紀伊田邊 南方熊楠

此答文は、主として、大正九年東京刊行『性之研究』二號と三號に出した拙文「孕石の事」と、予の未刊稿「燕石考」より採り成した物である。

「やぶちゃん注：「孕石の事」については、[サイト「私設万葉文庫」](#)にある、[電子テクスト](#)（[底本は平凡社『南方熊楠全集』第三卷（雑誌論考Ⅰ）一九七一年刊](#)）（[新字新仮名](#)）の、[ページ・ナンバー](#)『497』の「孕石のこと」で読める。

「燕石考」（えんせきかう）は英文論文『The Origin of the Swallow-Stone Myth』（「燕石神話の起原」）であるが、平凡社「選集」の第六巻、及び、河出文庫の『南方熊楠コレクション』の「II 南方民俗学」で岩村忍氏の訳（二つは同一）で読める。この「燕石考」及び「燕石」（「竹取物語」の「燕の子安貝」を始めとして、比定対象物は複数ある）については、[「南方熊楠 本邦に於ける動物崇拜（14：燕）」](#)の私の注で少しく引用に形で述べてあるので参照されたいが、その複数の比定物の内では、タカラガイ類（腹足綱直腹足亜綱 Apogastropoda 下綱新生腹足上目吸腔目高腹足亜目タマキビ下目タカラガイ超科タカラガイ科 Cypraeidae）の他に、有力な一つが、「石燕せきえん」で、これは二枚の前後の殻を持つ海産の底生無脊椎動物（左右二枚の殻を持つ斧足類を含む貝類とは全く異なる生物）である冠輪動物上門腕足動物門 Brachiopoda に属する腕足類の化石で（腕足類の知られた現生種では、舌殻綱シャミセンガイ目シャミセンガイ科シャミセンガイ属ミドリシャミセンガイ *Lingula anatina* が知られる）、石灰質の殻が「翼を広げた燕（つばめ）に似た形状」であることからの呼称。表面には放射状の襞があつて、内部に螺旋状の腕骨がある。古生代のシルル紀から二疊紀にかけて世界各地に棲息した（当該時代の示準化石）。中国では、その粉末を漢方薬として古くから用いた。Spirifer（ラテン語：スピリフェル）とも呼ぶ。

「此石を古希臘でエーチテースと云た。その意譯で、獨語のアドレル・スタイン。露語のオーリスイ・カーメン。佛語のピエール・デーグル。西語のピエドラ・デ・アギラ。皆な、英語のイーグル・ストーンと同じく、「鷺石」の義だ。獨語で、又、クラツペル・スタイン、露語でグレムチイ・カーメンといふは、ガラガラ鳴る故、「ガラガラ石」の意だ。西曆一世紀に成つたプリニウスの「博物志」卷十の三章に、鷺に六種ありと述べ、四章に、其内、四種は、巢を作るに、鷺石を用ゆ。此石は、藥効、多く、又、よく火を禦ぐ。其質、恰かも孕んだ様で、之を、ふれば、中で、鳴る。丁度、子宮に胎兒を藏むる如く、石中に小石あり。但し、鷺の巢より採て直に使はねば、藥效なし、と記す。又、委細を三六卷三九章に述べて曰く、「鷺石は毎も、雌雄二個揃ふて、鷺巢にあり。是れ無ければ、鷺は蕃殖せず。随つて、鷺は、一産二子より、多からず。鷺石に四種あり。第一、アフリカ産は、柔かで小さく、其腹中に、白く甘い粘土を藏む。その質、碎け易く、通常、女性

の物と、みなさる。第二に、雄なる物は、アラビア産で、外見、没食子色（暗褐）若くは帯赤色、其質、硬く、中にある石、亦、堅い。第三、キプルス島の産は、アフリカ産に似るが、其より大きく、扁たく、他の圓きに異なり、内には、好き色の砂と、小石が混在し、その小石は、指で摘めば、碎くる程、柔かい。第四は、ギリシアのタフイウシア産で、「タフイウシア鷲石」と呼ぶ。川底より見出され、白く、圓く、内にカリムステふ一石を藏む。鷲石、種々なれど、是程、外面の滑かなは、ない。是等の鷲石、孰れも性に供えた「やぶちゃん注…ママ。」諸獸の皮に包み、妊婦や、懐胎中の牛畜に佩しめ、出産の際迄、除かねば、流産を防ぐ。もし出産前に取去れば、子宮、落脱す。又、出産迫れるに取去ずば、難産する。」と。

「やぶちゃん注…以上のプリニウスの「博物誌」の当該部は、所持する雄山閣の全三巻の全訳版（中野定雄他訳・第三版・平成元（一九八九）年刊）で確認した。熊楠は「卷十の三章」と言っているが、引く内容自体は「四」である。そこでは、その鷲石を『ある人はガキテスと呼ぶ』とある。「三六卷三九章」は『鷲石（アエティテス）』の項で、『タフイウシア産で、「タフイウシア鷲石」と呼ぶ』の部分は『タピウサ種として知られている第四種は、タピウサのレウカス島に産する。タピウサというのは、イタカからレウカスへ船で行くとき』、『右にある地区だ』とある。「タピウサ」は判らないが、「イタカ」は現在のギリシャの「イターキ島」、「レウカス」は「レフカダ島」であるから、グーグル・マップ・データのこの中央附近になるか。「川底」（訳本では『溪流』）とあるからには、レフカダ島の内陸部であろうか。」

一九〇五年板、ハズリットの「諸信及俚傳」一卷に云く、鷲石は臨産の婦人に奇効ありと信ぜられた。レムニウス説に、左腕に、心臓より無名指へ動脈通ふ處あり、其邊え「やぶちゃん注…ママ。」此石を括り付置ば、いかな孕みにくい女も、孕む。孕婦に左様に佩びしむれば、胎兒を強くし、流産も、難産も、せず、又、自ら經驗して保證するは、産婦の腿に、之を當れば、速かに安産す、と。ラプトン曰く、孕婦の左臂又は左脇に鷲石を佩びしむれば、流産せず、且つ、夫婦、相好愛せしむ。又、難産の際、之を腿に括り付れば、忽ち、安産す。又、蛇の蛻皮を腰に巻付ても、安産す、と。是は、東西に、例、多き、「似た物は、似た患を救ふ。」といふ療法で、眞珠が魚の眼玉に似るから、眼病にきくの、キムラタケは陽物そつくり故、壯陽の功、著し、とか、虎や狼は、犬より強いから、その肉や骨は犬咬毒を治すとか、黄金の色が、似おる「やぶちゃん注…ママ。」から、黄疸に妙だ、等、信ずる如く、蛇が皮をぬぎ、穴をぬけるのが、赤子の産門を出るに類し、鷲石の内部に小石を藏せるが、子宮に胎兒を藏むるに似たよりの迷信だ。

「やぶちゃん注…『ハズリットの「諸信及俚傳」イギリスの弁護士・書誌学者・作家ウィリアム・カルー・ハズリット (William Carew Hazlitt 一八三四年～一九一三年) 著の *Faiths and Folklore* (「信仰と民俗学」)。

「レムニウス」オランダの医師で作家のレビヌス・レムニウス (Levinus Lemnius 一五〇

五年（一五六八年）。[「Internet archive」の当該書](#)のこちらの左ページの左にある *Ætles* の項がそれ。「アエタイト」は熊楠が古ギリシャ語で「エーチテース」と音写したそれで、ギリシャ語由来の鉱物「鷲石」の意である。

「無名指」薬指の異名。

「ラプトン」Lupton。人物は不詳だが、前注の箇所、すぐ後に出て来る。

「キムラタケ」まず言っておくと「キノコ」ではない。葉緑素を欠いた多年草で完全な寄生植物にして高山植物であるシソ目ハマウツボ科オニク（御肉）属オニク *Boschniackia rossica* の別名である。奇体な形状は当該ウィキを見られたいが、異名の『キムラタケは、黄紫茸」「金精茸」と書いて「きむらたけ」と読み』、中国や本邦で『強壯剤として利用されたことによる』。『また、「をかさ藪」「おかさたけ」ともいう』とあった。」

一五六八年、ヴェネチア板、マッチオリの「薬物論」には、「鷲石をふれば、内部に音する事、孕めるが如く、其腹中に、一石、あり。之を産婦の左臂に佩ぶれば、流産を防ぐ。扱、愈よ、臨産となれば、臂から取去り、其腿に括り付ると、安産する。此石、又、盗人を露はす効、あり。パンに之をそつと入て、食しむるに、盗人、噛めども、嚙み下す、能はず。又、鷲石と共に煮た物をも、嚙み能はず。その粉を、蜜蠟か、油に和し、用れば、癩癩を治す。」と出で、一八四五年、第五板、コラン・ド・プランシーの「妖怪辭彙」六頁には、『鷲石を、孕婦の腿に付れば、安産すれど、其胸に置ば、出産を妨たぐ。ジオスコリデス説に、此石を焼た粉を、パンに混じ、嫌疑ある人々に食せば、少しでも其粉が入たパン片を、盗人は、嚙み能はず。今も、希臘人は、呪言を誦して、右様のパンを盗人穿鑿に用ゆ。』と筆す。全く、鷲石の内に一石を藏すると、盗人が取つた物を懐中すると似るより、此石、よく、盗人を見出すと信じた者か、と迄は書た物の、なぜ癩癩にきくかは、一寸、解き難い。先は、氣絶した患者が回生すると、鷲や人の子が産まれて世に出るとを、一視して、言ひ出したで有う。

「やぶちゃん注：『マッチオリの「薬物論』』イタリアの医師・博物学者ピエトロ・アンドレア・グレゴリオ・マッテイオリ (Pietro Andrea Gregorio Mattioli 一五〇一年〜一五七七一年)。当該ウィキによれば、『医学に関する著作に加えて、プトレマイオスの』「ゲオグラフィア」『などのラテン語やギリシャ語の著作からイタリア語への翻訳をおこなった。特に、ディオスコリデスの本草書』「薬物誌」の『翻訳と解説が有名となった』一五四四『年にジャン・リュエルのラテン語訳を元に、図版なしで最初の翻訳・注釈本が出版され』、一五四八『年には』増補版の解毒剤に関する著作が加えられ』、一五五〇年と一五五一年にも『増補版が出版された』。一五五四『年には』「ディオスコリデスの著書への注釈」(*Commentarii in sex libros Pedacii Dioscoridis*) が『出版された。それまで広く流布されていたジャン・リュエルの注釈本とは一部の解説が異なり』五百八十三に及ぶ『木版画が添付された』とある。所持する『南方熊楠コレクション』の「II 南方民俗学」(一九一一年河出文庫刊)にある長谷川興蔵氏の注によれば、この「薬物論」というのは、『熊

楠は恐らく内容に即して、『薬物論』としたのであろうが』、彼が従ったものは、同英文ウイキにある、一五六八年版の *I discorsi di m. Pietro Andrea Matthioli sanese, medico cesareo, et del serenissimo principe Ferdinando archiduca d' Austria &c. nelli sei libri di Pedacio Discoride Anazabeo della materia medicinale. Venezia* が、それであるとしておられるよび、discorsiは『談話』の意であるとされておられる。

『コラン・ド・プランシーの「妖怪辞彙」』フランスの文筆家コラン・ド・プランシー (J. Collin de Plancy 一七九四年或いは一七九三年〜一八八一年或いは一八八七年) が一八一八年に初版を刊行した *The Dictionnaire infernal* (「地獄の辞典」) と思われる。』

一八八五年第三板、バルフォールの「印度事彙」一に、プリニウスは鷲石が治療に効ある外に、難船等の災禍を禦ぐと説たとあるが、プリニウスの書にそんな事、一向みえず。暗記、又、引用の失だろう「やぶちゃん注：ママ。以下同じ」。扱、『アラビア人、之をハジャー・ウル・アカブと稱へ、タマリンド果の核に似たれど、中空で、鷲の巢の内に見出ださる。印度から鷲が持つてくると信ず。』と述べた儘、何に用ゆと、かき居らぬが、畢竟、歐人同様、専ら、産婦に有効とするのだろう。そして又、アラビア人は鷲石は難船等の災難を予防すと信ずるので有う。

「やぶちゃん注：『バルフォールの「印度事彙」』スコットランドの外科医で東洋学者エドワード・グリーン・バルフォア (Edward Green Balfour 一八一三年〜一八八九年…インドに於ける先駆的な環境保護論者で、マドラスとバンガロールに博物館を設立し、マドラスには動物園も創設し、インドの森林保護及び公衆衛生に寄与した) が書いたインドに関する Cyclopaedia (百科全書) の幾つかの版は一八五七年以降に出版されている。ちょっと手間取ったが、『Internet archive』の [The Cyclopaedia of India \(一八八五年刊第一卷\) の当該箇所はこの右ページの終りにあるEAGLE STONESの項である](#) ことが判った。

「タマリンド果」アフリカの熱帯原産で、インド・東南アジア・アメリカ州などの亜熱帯及び熱帯各地で栽培され、食用となるマメ目マメ科タマリウム亜科 Detarioideae タマリンド属 タマリンド *Tamarindus indica* の果実。』

プリニウスの「博物志」三七卷五九章に、メチアより來たるガツシナデてふ石は、其色、オロブス豆の如くで、花紋あり、此石を振へば、子を孕みおると判る。三ヶ月間、孕むとあるから、其丈けたてば、石が子を産むのだ。同卷六六章には、ペアニチスは、子を孕む石で、婦女の安産を助く。マケドニア産で、外見、水がこり固まった様だ、と載す。孰れも、構造、鷲石に似乍ら、鷲に係る話のない品らしい。

「やぶちゃん注：既出の訳書では、『メデア産のガツシナデスはヤハズエンドウの色をしており、』(中略)『これは妊んでいて、それを振ると支給の中に石はいっていることを示すといわれるひとつの寶石である。「胎児」が発育するのに三カ月かかるという』とあった。この「ヤハズエンドウ」(矢筈豌豆) は、マメ目マメ科ソラマメ属オオヤハズエ

ンドウ亜種ヤハズエンドウ *Vicia sativa* subsp. *nigra* v. 我々が異名の「カラスノエンドウ」
(鳥野豌豆)で親しんでいるものと同じである。 当該ウィキによれば、『原産地はオリエン
トから地中海にかけての地方であり、この地方での古代の麦作農耕の開始期にはエンドウ
などと同様に栽培されて作物として利用された証拠が考古学的資料によって得られている
そのため、若芽や若い豆果を食用にすることができし、熟した豆も炒って食用にできる
が、その後栽培植物としての利用はほぼ断絶して今日では雑草とみなされている』とある。
熊楠の「オロブス豆」のそれはギリシャ語由来の *orobus* で「苦いレンゲ」(マメ科マメ亜科
ゲンゲ属 *Astragalus*) の意のようである。】

鷺石の外にも、色々の物を、種々の鳥が用いて、繁殖の助けとする話、多い。其役目の
異同に随ひ、雑と分類して説かう。

(一) 卵を破れざらしむる物 一八八〇年刊行『ネーチュール』二二巻に、チャテル
が引た如く、『フィロの「避邪方」に云く、鷺は巢の内に、或石を匿しおき、其卵の破壊
を防ぐ、丁度、燕がパースレイの頂芽を以て、子を護る如し。其石を、孕み女が頸に付れ
ば、子は安々と産れる、と。又、エリアノスの「動物書」三卷二五章に云く、甲蟲が燕の
卵を書しにかゝると、燕はパースレイの小枝の尖を投て、以て、之を防ぐ。』と。

「やぶちゃん注：以上の、Natureの当該部は「Internet archive」のうちの右ページ下方
から始まって次のページに及ぶ、「チャテル」(CHATEL) 氏の記事 The Stone in the Nest of
the Swallow であることが視認出来た。それを見るに「フィロ」は Phile なる人物で、その書
「避邪方」は、*Remedies Against Sorileges* (「諸魔法に対する処方類」) であり、「エリア
ノス」は *Aelianus*、その書名「動物書」は *Natura Animal*、であることが判った。則ち、「エ
リアノス」は「アイリアノス」で、熊楠は以下の「(二)」では「アイリアノス」と表記し
ている。古代ローマの著述家クラウディオス・アイリアノス(ラテン文字転写：Clausius
Aelianus 一七五年頃～二三五年頃)のこと。彼の「ゲスタ・ロマノルム」(ラテン文字転
写： *Gesta Romanorum*) は、中世ヨーロッパのキリスト教社会に於ける代表的なラテン語で
書かれた説話集で、標題は「ローマ人たちの事績」を意味するが、「ゲスタ」は中世に於
いては「物語」の意味合いとなり、「ローマ人たちの物語」と訳すべきか。古代ローマの
伝承などを下敷きにして考えると考えられているが、扱っている範囲は古代ギリシア・ロー
マから中世ヨーロッパ、更には十字軍が齎したと思われる東方の説話にも及んでいる。題
材はさまざまなジャンルに亙るが、カトリックの聖職者が説教の際に話の元として利用で
きるよう、各話の「本編」の後に「訓戒」としてキリスト教的な解釈編が附されてある
(Wikibooksの同書に扱った)。「慶應義塾大学メディアセンター デジタルコレクション」
の「ゲスタ・ロマノールム」によれば、『現存する』百十一『冊の写本数から』ゲスタ・
ロマノールム』はヤコブス・デ・ヴォラギネの『黄金伝説』と『並ぶ人気を博した書物
であったと推察される』が、『聖人伝を纏めた』それ』と異なる点は題材で、『ゲスタ・
ロマノールム』には『若干の聖人伝に加え、伝説、史話、逸話、動物譚、笑話、寓話、ロ

マンスなど、ありとあらゆるジャンルの物語が登場する。そして、どの話の後にも教訓解説『が書かれている。この内容の豊かさ故に』本書は『後にシェイクスピアの』『ヴェニス商人』、『さらには芥川龍之介に至るまで影響を与えた』。『ラテン語で印刷された』本書は一四七二年に『ケルンで刊行されて以来、様々な増補、改変が行われた。従って』、本書には『決まった物語数というものはない』。『写本は』十三『世紀頃に編まれたと考えられているが、印刷本が刊行されるようになってから』百八十一『話が定本となり、さらに編者によって各話が改変されたり、数十話が付け加えられたりしたらしい』とあった。

以上の引用に出た芥川の影響については、『芥川龍之介書簡抄142 / 昭和二(一九二七)年二月(全) 十六通』の「昭和二(一九二七)年二月十六日・田端発信・秦豊吉宛」の中に言及があり、また、『芥川龍之介 手帳12 《12-19/12-20》』の「《12-20》」にも記載があるので、見られたい。なお、以下、欧文文献の著者や書名及び、神話・歴史上の神や人物は、注を始めると、異様に手間がかかり、ちっとも電子化が進まなくなるため、私がどうしても躓いたものは、是非ともオリジナルに語りたく感じたもの、そして、注しないと後が読めないもの以外は、ちよつと調べても判らない場合は、注することをあつさりやめることとする(既に先行して熊楠が引用して分かっている場合は例外的に記す)。私が判っているものも、原則、注しない。悪しからず。

「パースレイ」原文 parsley で、これは、所謂、「パセリ」、セリ目セリ科オランダゼリ属又はオランダミツバ属オランダゼリ *Petroselinum crispum* のことである。」

(二) 塞がれた巢を開通する物 オーブレイの説に、サー・ベンネット・ホスキンスの園丁が、試しに、啄木鳥の巢の入口の孔を、斜めに釘を打つて、遮り、其巢のある木の下に清浄な布を廣げおくと、数時間へぬ内に、鳥が、釘を除き、其時、用いた葉が、布の上に留まり有た。世に傳ふ、ヒメハナワラビは、斯る障碍物を除くの功あり、と(一九〇〇年板、ベンジャミン・テイロールの「ストリオロジ」、一五三頁)。猶太説に、ソロモン王、音を立ずに金石を掘り出ださんとて、鬼神の教え「やぶちゃん注…ママ。」により、ガラス板で 鴉 はしよちがらす (又、シギとも、鷲とも云) の巢を蓋ふと、鴉、還つて、其卵を護る能はず、飛去て、智石(シャミル)を持來つて、ガラスを破つた。是は、鐵も力及ばぬ堅い物を、容易に切り開く力、あり。又、アイリアノスは、漆喰しっくいで、ヤツガシラ鳥の巢をぬりこめおくと、忽ち、ポア草を持來り、漆喰にあて、之を破り開き、子に餌を與ふ、と言た。「ゲスタ・ロマノルム」には、駝鳥が、同じことをする、と見ゆ(ベールリング・グールドの「中世志怪」、一六章)。日本にも「譚海」一一に、「ギヤマン(金剛石)と云物、水晶の如く、堅くて、玉の様なる物なり。オランダ人、持來る。又、常に、ギヤマンを、オランダ人、無名指に、かねの環を掛けて、挟み持て、刀劍の代りに用るなり。石鐵の類、何にても堅き物を、このギヤマンにて磨る時は、微塵に碎けずということ、なし云々。全體、ギヤマンと云は、鳥の名なる由。此鳥、雛を生じたるをみて、オランダ人、其雛を取りて、鐵にて拵え「やぶちゃん注…ママ。」たる籠に入れ置く。時に、親鳥、雛の鐵籠にあるを

見て、頓て、此玉を含み来り、鐵の籠を破り、雛を伴て飛去る。其落し置たる玉ゆえ「やぶちゃん注・ママ。」、鳥の名を呼で、ギヤマンということとぞ。此物、オランダ人も何國にある物と云事を知ず、と云り」と記す。

「やぶちゃん注：「ヒメハナワラビ」シダ植物の一種で、維管束植物門大葉植物亜門大葉シダ綱ハナヤスリ（花鏢）亜綱ハナヤスリ科ハナワラビ（姫花蕨）属ヒメハナワラビ *Borychium lunaria*。ユーラシア・北アメリカ・グリーンランドなどの極地附近に分布し、本邦では、北海道から本州中部以東の高山・亜高山に稀れに植生する。

『ベーリング・グールドの「中世志怪」、一六章』イングリランド国教会の牧師にして、考古学者・民俗学者。聖書学者であったセイバイン・ベアリング＝グールド (Sabine Baring-Gould 一八三四年～一九二四年) が一八六六年に刊行した *Curious Myths of the Middle Ages* (「中世の奇妙な神話譚」)。一八七七年版を「Internet archive」で「十六章」は「ここから『譚海』」一に、「ギヤマン (金剛石) と云物、……」事前に私のブログ・カテゴリ『津村宗庵「譚海」』で「譚海 卷之十一 ギヤマンの事」として、フライングして電子化しておいた。必要と思われる読みは、そちらで附してある。」

(三) 卵を暖むる物 支那人は、鶴こうと鵲かさぎが、礬石で、卵を暖め孵すといふ (『博物志』四。「本草綱目」十)。日本でも、「善光寺道名所圖會」五に、鶴が卵を孵すに、朝鮮人參で暖めるといふ。支那人は、礬石の性、熱く、昔し、之を埋めた地は、乾いて、植物、生ぜず、と信じ、明朝に、南京の乞食、其少量を嚙で、冬、寒を禦ぎ、春に成ると、數千人、死んだといふ (『本草綱目』十。「五雜俎」五)。だから、鳥がそれで卵を孵すと云たのだ。人參が物を温むるとの信念に就ては、「本草綱目」一二、「大英百科全書」十一板一二卷、其條。一八七二年板、ラインド「植物界史」五二九頁。一八八四年板、フレンド「花及花傳」二卷六二八頁をみよ。

「やぶちゃん注：「礬石」多数の死者が出たというのでお判りかと思うが、これは砒素を含んだ鉱物の一つで、猛毒。鼠殺しなどに使われた。

「博物志」三国時代の魏から西晋にかけての政治家で文人の張華 (二三二年～三〇〇年) の書いた幻想的博物誌にして奇聞伝説集。全十卷。以上の「鶴」のそれが、「中國哲學書電子化計劃」の影印本の画像のこの、後ろから二行目で視認出来る。

『「本草綱目」十』「金石之四」の「礬石」の記載。「漢籍リポジトリ」の同巻の [032-24] 以下を見られたい。「鶴」はそこに、三度、出る。その [032-26a] に続いて「特生礬石」が立項されており、その「集解」の中に、『弘景日舊説鵲』(鵲)『巢中者佳鵲常入水冷故取以壅卵令熱今不可得』とある。

『「善光寺道名所圖會」五に、鶴が卵を孵すに、朝鮮人參で暖めるといふ』国立国会図書館デジタルコレクションの『新編信濃史料叢書』第二十一卷 (一九七八年信濃史料刊行会編刊) 同書第五卷の中に神鳥としての鶴の挿絵があり、そのキャプションに当該内容が記されているのを視認出来る。

『明朝に、南京の乞食、其少量を嚙で、冬、寒を禦ぎ、春に成ると、數千人、死んだといふ（『本草綱目』十。「五雜俎」五）』前者では確認出来なかったが、『中國哲學書電子化計劃』の「五雜俎」の電子化の「第五卷 人部」に、「京師謂乞兒爲花子、不知何取義。嚴寒之夜、五坊有鋪居之、內積草秸、及禽獸茸毛、然每夜須納一錢於守者、不則凍死矣。其饑寒之極者、至窖乾糞土而處其中、或吞砒一銖、然至春月、糞砒毒發必死。計一年凍死、毒死不下數千。而丐之多如故也。」とあるのが（ガイド・ナンバー「54」）確認出来た。』

（四） 一旦失なふた活力を回復する物 「甲子夜話」一七に、お江戸青山新長谷寺の屋上に鶴が巢を構へたのを、和尚の不在に、寺男が、其卵を盗み煮食はんとした。處へ、和尚、歸り、雌雄そろふて、庭に立て訴ふる體に、和尚、僕を糺して、仔細を知り、煮た卵をみるに、熟し居た。「これを、還さば、心を慰むに足らん。」とて、巢に戻しやると、三、四日の間だ、一つの鶴、みえず、然るに、なにか、草を啣んで歸り來り、其卵、遂に、孵つた。其草の實、地に落ちて生ぜしをみると、イカリソウ「やぶちゃん注…ママ。後も同じ。」だつた、と記す。「本草綱目」の淫羊藿はイカリソウで、能く、精氣を益し、筋骨を堅くし、眞陽不足者宜レ之、久服之使下人好爲陰陽「有上下子、嘗有淫羊」、一日百遍合、蓋食此草「故名。「眞陽の足らざる者は、之れを宜しとす。久しく服すれば、人をし、好んで、陰陽を爲し、子、有らしむ。嘗つて、淫羊有り、一日に、百遍、合す。蓋し、此の草を食せるなれば、故に名づく。」とある。又、夫絶陽無レ子、女人絶陰無レ子「丈夫の絶陽にして、子、無きもの、女人の絶陰にして、子、無きもの」に、功、有りと鶴、蓋し、是を以てするか、と靜山侯は言た。男女を暖ためて、子、有しむるから、卵をも、暖め、雛に孵らしむると心得たのだ。今も件の寺に、かの草と傳説を傳え「やぶちゃん注…ママ。」、先年、三村清三郎氏が、其葉を、寺僧より買ひ、予に贈られた。歐州にも和漢産と別だが、此屬の草、數種あり。其一つ、ポリガラ・アルピヌムを、英語でバレン・ワールト、不生殖草といふ。和漢産と反對で、之を食へば、一件を遂行し能はなくならずといふより、名づけたと承はる。氷洲人は、鴉の卵を煮熟しても、親鴉が、或る黒石もて、よく復活せしむと信じ、蘇格蘭にも同説あり。今の希臘人、亦、鶯が伏せおる「やぶちゃん注…ママ。」卵を、取て煮た後、其巢に返しおけば、親鳥がジョルダン河へ飛び往き、一小石を齎し、歸つて巢に納めて、卵を孵す、と、いひ、其石を採つて、邪視を避け、種々の病を治す。之を「緩め石」と呼で、屢ば、鍍金して珍藏す、と（ペーリング・グールド「中世志怪」一六章。一九〇一年八月と、一九〇四年八月、龍動發行、『マン』。「やぶちゃん注…『甲子夜話』のそれは、先行する南方熊楠の「鴻の巢」の注に必要であったため、既に『フライング単発 甲子夜話卷之十七 19 新長谷寺鶴の事并いかり草の功能』として電子化注してあるので、そちらをまずは見られたい。

「淫羊藿」「イカリソウ」は、モクレン亜綱キンポウゲ目メギ科イカリソウ（錨草）属イカリソウ *Epimedium grandiflorum* var. *thunbergianum*。当該ウイキによれば、『和名』『錨草』で、『花の形が和船の錨に似ていることに由来する』。『茎の先が』三『本の葉柄に分

かれ、それぞれに『三』枚の小葉がつくため、三枝九葉草(さんしくようそう)の別名がある。『地方によって、カグラバナ、ヨメトリグサともよばれ』、『中国』での『植物名は淫羊藿(いんようかく)』とあり、『花言葉は、「あなたを離さない」である』とあった。

『薬効は、インポテンツ(陰萎)、腰痛のほか』、『補精、強壯、鎮静、ヒステリーに効用があるとされる』。『全草は淫羊藿(いんようかく)、正確には淫羊藿』という生薬で精力剤として有名である。『淫羊藿とは』、五〇六『月頃の開花期に』、『茎葉を刈り取って天日干しにしたもので、市場に流通している淫羊藿は、イカリソウの他にも、トキワイカリソウ、キバナイカリソウ、海外品のホザキノイカリソウ(ホザキイカリソウ)も同様に使われる』が、『本来の淫羊藿は中国原産の同属のホザキノイカリソウ *E. sagittatum*』(常緑で花は淡黄色)で、『名は』、『ヒツジがこれを食べる精力絶倫になったという伝説による』。『イカリソウの茎葉には有効成分としてはイカリインというフラボノイド配糖体と、微量のマグノフィリンというアルカロイドなどが含まれ、苦味の成分ともなっている』。『充血を来す作用があり、尿の出を良くする利尿作用もあるとされている』とある。

『「本草綱目」の淫羊藿』同書の「淫羊藿」であるが、『漢籍リポジトリ』の「[卷十二下](#)」の「[草之一](#)」の[037-256]以下であるが、見て戴くと判るのだが、熊楠は、例によって漢文原文をバッチワークしており、ソリッドにはこの引用部は存在しないので、注意が必要である。但し、同書の述べている内容を改変はしていない。

「三村清三郎」市井の書誌学者三村竹清(明治九(一八七六)年〇昭和二八(一九五三)年)の本名。号のそれは、彼が京橋八丁堀で竹間屋を営んでいたことによる。後に屋代弘賢や曲亭馬琴のそれを真似て、『新耽奇会』を作り、珍しいものを持ち寄って集い、その図録「新耽奇漫録」を纏めている。

「ジヨルダン河」中東のヨルダン川。」

全體、「この鷲石とは何物か」と尋ねるに、「大英百科全書」一一板一六巻にある通り、其純正品は、褐鐵鑛の團塊、中空で砂礫を蓄へ、ふれば、ガラガラと鳴る物だ。ポストクとリレイが、英譯本プリニウス「博物志」三六卷三九章の註に、鷲石は、粘土を混じた鐵石の圓塊で、或は、中空、或は、内に、他の石、又、少しの水、又、或る礦物末を藏むるとあるのが、普通品で、不純の褐鐵鑛だ。日本にも、大有りだが、たゞ之を鷲と連ねた話はない。古來、本草家や玩石家が、漢名「太一餘糧」、和名「スマイシ」、又、漢名「禹餘糧」、和名「イシナダンゴ」とした兩品が、尤も歐州の鷲石に恰當「やぶちゃん注:「かふたう」(現代仮名遣「こうとう」)は過不足なく一致・相当すること。」し、漢名「卵石黃」、和名「饅頭石」といふは、ヤゝ似て、非なる者らしい。歐州の鷲石に種々ある如く、支那でも「太一餘糧」と「禹餘糧」の區別、判然たらず。因て、漫に此様な石を「太一禹餘糧」と呼だと、「本草綱目」にみえる。『性之研究』第一卷第六號二二二頁に、「鷲石」を「孕石」と書き有たに就ては、本話の最末に拙見を述よう。一八七四年、パリ板、スプランとチエールサンの、「支那藥材篇」にも、既に、予輩、浙江沿岸地方より得た「禹餘

糧」てふ物は、西洋で「鷲石」と云るゝ「水酸化鐵」で、大きさ、鴨卵ほどで、中空に、多く、小石粒あり、下痢を止むるに薬用さる、とある。

斯る物を、鷲に引合した古歐人の心が、知れぬ様だが、全く解説なきに非ず。此田邊町の北、三哩「やぶちゃん注…約四・八三キロメートル。」斗り、岩屋山の頂に近く、岩洞中に観音像を安置し、參詣、斷ず。洞の内外の岩壁、自然に棚を重ねた状をなし、鷲が巢ふに恰好だ。此岩壁と岩棚に、無数の小石を含みあり。何れも楕圓で、較や扁たく、空なる腹内に、黄土、滿つ。「饅頭石」と稱ふ。此饅頭石を包んだ岩が軟らかいから、風雨でさらされて、饅頭石、離れ出で、或は、洞底に、或は、棚上に、時々、落留まる。信心の輩、拾ひ歸つて記念とし、佛壇杯に納め、不信心の者は、硯滴みづいれに作り、又、小兒の玩物とし、或は、中の黄土を畫の具に試みたが、うまく行ぬと、きく。此近處に、鷲をみることに、全くなきに非ねば、鷲が、此岩棚に巢くひしことも、なしと限らず。果して鷲が巢つたなら、かの饅頭石が、多少、其巢内に見出された事も有う。扱、ポストック及びリレイ英譯、プリニウス十卷四章註に、鷲石、乃ち、「含鐵子持ち石」の片塊が、たまには、鷲の巢の中より見出ださるゝは、有り得べきことだ、と言ひおり「やぶちゃん注…ママ。」、凡て、人間の判斷は、必しも、一々、正確嚴峻な論理を踏むを、またず、多くは、眼前の遭際に誘はれ、左右される。既に以て、ベーン先生の「論理書」にも、數日間、或る地に滞在中、晴天斗り、續いたら、其地は、年中、晴天のみである様心得た人、多く、彼地は、いつも天氣のよい所など、よくいふ物、と説かれた。其と齊しく、當初、此石を鷲石と名づけた地が、上述、田邊近所の岩屋山の如く、自然に、鈴石、多くある岩山に、鷲が巢くひ、其巢の内に、偶然、鈴石を見出だす事、一度ならず、阿漕の浦のたび重なりて注意すると、其石中に、又、小石を藏せるを見て、石が子を孕んだ物と誤認し、延て、鷲が、此石に、其卵を孵す力、あり、と知て、巢に持ち込んだと、合點したろう「やぶちゃん注…ママ。」。

「やぶちゃん注…「岩屋山の頂に近く、岩洞中に観音像を安置」現在の和歌山県田辺市稲成町にある「岩屋観音」(グーグル・マップ・データ航空写真)。サイド・パネルの画像の、これとか、これ、或いは、これや、これを見ると、熊楠が言っている崖面の特異な楕円状の穴群が確認出来る。なお、サイト「[LAND LOCAL](#)」の『[和歌山県・田辺市](#) 絶景と巖かな境内「岩屋山観音堂(観音寺)」へ行ってきた。』によれば、『ここは今から約八百五十』年ほど前、那智山の滝で苦行された文覚上人がその後、牟婁地方をまわられた時、一夜の夢に靈感をおぼえて岩屋山に立ち寄り、そして、大岩窟に念持仏の聖観世音像をおまつりしました。』これが観音密寺の始まりと伝えられて『おり、『その後は、仏徳高い厄除け寺として、人々の信仰を集めてきましたが、昔、小栗判官兼次が、当山に参籠し、『観音靈夢によるお護りをうけたと語り継がれていることなどによっても、古くから熊野信仰につながる霊場として広く世に知られていたことがわかります。』今もなお、『岩屋山』の名で親しまれ、『健康長寿、交通安全、学芸成就を願ってお参りする人々が後を立ちません。特に、ひき岩群に設けられた新西国』三十三『番霊場を巡れば、その眺

めは絶景かつ雄大であり、大自然の静けさと靈気ただよう寺院として感慨そぞろ深いものがあります。高山寺の末寺であり、天正年間、『豊臣勢による熊野侵攻の際には、高山寺の尊像をここに移して災禍をまぬがれ、太平洋戦争末期にも、万一を考えて再度の避難地となった』とあった（最後に『岩屋山説明書より』引用とある）。

此様な石に催生安産の奇効ありと信ずるには、必しも、その偶然、鷲巢内にあるを見るを須たず。そは、和漢共、斯る石を右様の効ある物と信じ乍ら、驚と何の關係ありと説かぬで、知れる。蓋し、支那人は、烏麥からすむぎが、至つて生え易く、熟して落ち易きをみて、催生劑とした如く、饅頭石の内に、土や砂礫を藏め、宛然、母の體内に子ある如きをみて、是にも、催生安産の効ありと、したのだ。少しく類例を擧んに、米國のズニ印甸の女は、産に臨んで、生なまで豆を嚙む。豆が、やすやすと喉を滑り下る様に、子も安く産まるゝといふのだ。ニウギネアのコイタ人は、山の芋の收穫を増す爲め、畑に、その種芋たねの形した石を栽え「やぶちゃん注…ママ。」、バンクス島人は麩包果を殖やさん迎、呆れる程、此果に酷似した珊瑚石を植る（『本草綱目』十。「重修植物名實圖考」一。一九一九年十一月『マン』八六項。一九一四年板、バーン「民俗學必携」二四頁。一八九一年板、コドリングトン「ゼ・メラネシアンズ」一一九と一八三頁）。

「やぶちゃん注…」からすむぎ「烏麥」単子葉植物綱イネ科カラスムギ属 *Avena* の食用にされる四種、或いは、その代表種であるエンバク *Avena sativa*。

「ズニ印甸」アメリカ・インディアンの一民族。ニューメキシコ州中部と、アリゾナ州との州境附近に住む。独自の言語を有し、その起源や初期の歴史は知られていない。トウモロコシ農耕を主な生業とし、銀細工・籠細工などに優れている。社会は十三の母系氏族から成るが、主な役職には男性が就く。複雑な儀礼体系を有し、男性が神乃至は精靈に扮して、仮面や衣装を着ける「カチーナ踊り」も残されているが、殆んどが現代社会に同化されてしまった（『ブリタニカ国際大百科事典』に拠った）。

「コイタ人」パプア・ニュー・ギニアの中部地方、ポート・モレスビー（グーグル・マップ・データ）一帯の乾燥して痩せた海岸地帯に住んでいる少数民族。元々は内陸部に住み、海岸地帯の部族と交易に携わっていた。白人と接触後、海岸地方に移住し、オーストロネシア語系の言語を話す「モツ族」と共存するようになった。そのため、現在では、彼等固有の言語を話す者は非常に限られ、若年層はトク・ピシンや、英語を好んで話す傾向にあり、村での生活も文化面もコイタ族特有のものは殆んど残っていない（当該ウィキに拠った）。

「山の芋」パプア・ニュー・ギニア周辺で知られる古い芋類は、タロイモ（単子葉植物綱オモダカ目サトイモ科 Araceae のサトイモ類）・ヤムイモ（単子葉植物綱ヤマノイモ目ヤマノイモ科ヤマノイモ属 *Dioscorea* のヤマノイモ類）である。現在はそれに、タピオカの原料として知られる、キントラノオ目トウダイグサ科イモノキ属キャッサバ、*Manihot esculenta* も挙げられるが、これは、後に南米から移入されたものであり、しかも、木本低

木であり、狭義の日本人のイメージする「芋」類とは、ちょっとズレがある。

「バンクス島人」[バンクス諸島](#)（現在のバヌアツ共和国の北部にある群島）の先住民。

「麴包果」常緑高木でポリネシア原産のクワ科パンノキ属パンノキ *Artocarpus altilis* の実。

[当該ウイキ](#)によれば、『ほどよく熟した実を調理したとき』には、『焼きたての穀物のパン』のような触感』があり、風味は『じゃがいもに似ている』とあった。

『一八九一年板、コドリングトン「ゼ・メラネシアンス」一一九と一八三頁』メラネシアの社会と文化の最初の研究を行った英国国教会の司祭兼人類学者であったロバート・ヘンリー・コドリングトン (Robert Henry Codrington 一八三〇年～一九二二年) の *The Melanesians : studies in their anthropology and folklore* (「メラネシア人：人類学と民間伝承の研究」)。「Internet archive」で原本の当該部が読め、指示されたページは、[ここ](#)と、[ここ](#)。前の部分には石の霊性が語られてあり、後の部分では、珊瑚石がパンの実に驚くほど似ているという記載がある。』

そこで、鷲石を、石が子を孕んだ物、又、鷲が子を孵す爲め、巢へ持込だ、と解して、妊婦に佩びしめ「やぶちゃん注：底本では「ネしめ」であるが、意味不明なので、「選集」で訂した。」、試るに、利く場合も、有る。扱は、産婦に偉効ありと判断し、評判高まるに付ては、催生安産と、殆んど、同功一體なる、卵を暖ためるの、卵の破壊を禦ぐの、煮抜かれたのを、再活せしむるのと、雑多の奇験も、此石に附會さるゝは、知れ切つた成行き。人間に取ても、此石のお蔭で、妻が安産すれば、新産婦は、一生の大厄を免れて、命、維れ、新た也。萬機改造して、特様の妙趣、あな、にへやう「やぶちゃん注：「あな」は感動詞だが、参道の「穴」を掛け、「にへやう」は「煮えやう」か。」、まして、女などの企て及ばぬ備え「やぶちゃん注：ママ。」、多し。去ば、後漢の安世高譯出「佛說明度五十校計經」に云く、佛言。是人譬如三姪洗女一、上頭姪洗自可、已妊身不レ知下胞胎兒在二腹中一 日大上、幾所姪洗、姪女爲二復姪洗一自可、至二兒成就一、十月當レ生、兒當レ轉未レ轉、當レ生未レ生、其母腹痛、自慙自悔當レ墮、痛時姪女啼聲聞第七天、「伊也土言布乃仁私多可羅土漸土宇美」、兒生已後其母痛愈、便復念二淫洗一、「禰太布利で夫仁佐波流公事工み」、便不レ念レ慙不レ念レ痛、便姪洗如レ故、「阿太々女氏吳奈土足遠佛津可美」、如レ是苦不レ可レ言、姪女亦不レ能三自覺二苦痛一。「於是夫茂嬪阿殿比女波自米駝土薄加遠伊比」(佛言はく、「是の人は、譬へば、姪洗姪女のごとし「やぶちゃん注：「姪洗」淫らな男女関係」。上頭くして、淫洗を、自ら可とす。すでに妊身るも、胞胎兒の、腹の中に在つて、日に大きになるを知らず、幾所の淫洗、姪女、復た、淫洗を爲すを自ら可とす。兒の成就するに至れば、十月にして當に生むべし。兒、當に轉ずべくして、未だ轉ぜず、當に生まるべくして、未だ生まれず。其の母、腹痛して、自ら慙ち、自ら悔ゆ。墮つるに當りて、痛む時、姪女の啼く聲は、第七天に聞こゆ。「いやと言ふのに、したからと、やつと、うみ。」。兒、生まれ已然りて後、其の母、痛み、癒ゆれば、便ち、復た、姪洗を念ふ。「ねたふりで、夫に、さはる、公事だくみ。」。便ち、慙を念はず、痛みを念はず。便ち、復た、淫洗なること、故のごとし。「あたたためて、くれなと、足を、ぶつつかみ。」。是くのごと

き苦しみ、言ふべからざるに、妬女は亦、自ら苦痛を覺る能はず。是に於いて、夫も「嬋殿、ひめはじめだ、と、ばかをいひ。」妻が安産、夫は大悦、苦んで、泣き、産んで、苦を忘れ、世にトシゴを、引つ切りなくうむすら、少なからず。随つて、孕んでは、鷲石を佩びて、安産、産んでは、之を帯びて、夫妻相好愛す。是ほど結構な事なく、鷲石ほど、重寶な物、なし、と信ずるに及んだのだ。

中世欧州で、普く讀まれた「動物譬喩譚（フィシヨログス）」原本の第十九譬喩は、ヴェチュールが、石の内に、又、石を放在する者を以て安産する話だ。ヴェチュールは、種屬、多般で、支那にも有て、鷲と名づく。高飛で有名な南米アンデス山のコンドル、亦、此類だ。何れも、多少、禿頭故、「博物新編」には「禿鷲」と譯した。鷲と近類だから、鷲石の話を、禿鷲が安産を得ん爲め用ゆる石に振替たのだ。プリニウスの「博物志」三十卷四七章、亦、孕女の足下に、禿鷲の羽を置けば、出産を早める、と言た。一六四八年、ボノニア板、アルドロヴァンジの「礦物集覽」四卷五八章に、大アルベルツスから引て述べた、禿鷲體内に生ずるクワンドリなる頑石は、詳説を缺きおる「やぶちゃん注」ママ。」が、禿鷲の安産石で有う。

「やぶちゃん注」：「動物譬喩譚（フィシヨログス）」フィシオログス（ラテン語転写：Physiologus）は、中世ヨーロッパで、聖書と並んで広く讀まれた教訓本。表題はギリシア語で「自然を知る者・博物学者」の意。ヨーロッパでは五世紀までに訳されたラテン語版が流布した。参照した当該ウイキによれば、『さまざまな動物、植物、鉱物の容姿、習性、伝承が語られ、これに関連して宗教上、道徳上の教訓が、旧約聖書や新約聖書からの引用によつて表現されている。とくにラテン語版は、のちに中世ヨーロッパで広く讀まれる動物寓意譚『ベステイアリウム』（Bestiarium）の原型になつたと言われる』とある。

「ヴェチュール」「種屬、多般で、支那にも有て、鷲と名づく。高飛で有名な南米アンデス山のコンドル、亦、此類だ。何れも、多少、禿頭」「鷲と近類」熊楠は民俗史上のそれを言っているものの、ここでの謂いは鳥類学上からは、当時の時点でも、既にして誤りが多過ぎる。まず、「ヴェチュール」は英語:vultureで、腐肉を漁る猛禽類を広く指す俗称であつて、特定の鳥の種名ではなく、ハゲワシ類やコンドル類を指す。その「ハゲワシ」であるが、これはタカ科 Accipitridae の多系統の科を指す。分類学的になかなか決定がなされなかつたが、現行では、タカ科のハゲワシ亜科 Aegyptiinae 及びハゲワシ亜科 Gypaetinae に属する種に「ハゲワシ」類は限定されている。しかし、では、中国語でそれを指すと熊楠の言っている「鷲」（現代仮名遣「ちょう」）は、実際には何を指すかと言えば、タカ目タカ亜目タカ上科タカ科 Accipitridae に属する鳥の内、オオワシ（タカ科オジロワシ属オオワシ *Haliaeetus pelagicus*）・オシロワシ（タカ科オシロワシ属オシロワシ *Haliaeetus albicilla*）・イヌワシ（タカ科イヌワシ属イヌワシ *Aquila chrysaetos*）・ハクトウワシ（タカ科ウシワシ属ハクトウワシ *Haliaeetus leuccephalus*）等のように、比較的大きめの種群を漠然と指す通俗通称なのである。而して、教義に日本で「鷲」は何に当てられるかという、本邦にも棲息する大型であるタカ科クマタカ属クマタカ *Nisaetus nipalensis*、漢字表記で「角

鷹」「熊鷹」「鵬」がそれなのである。[中文ウィキの同種のページ](#)を見ると、「鷹鵬」が当てられていることから、クマタカで納得されるのである。以上から、「クマタカ」は熊鷹の言うような「コンドル」類及び訳語の「禿鷲」類とは「同類」ではないのである。コンドルはタカ目コンドル科コンドル属コンドル *Vultur gryphus* であって、以上の意味限定から、コンドルは絶対に「鵬」ではないし、ちょっと禿げているからと言っても、現行の狭義の分類学上の狭義の二科の「ハゲワシ」類とも、当然のごとく、全然、同類ではないのである。因みに、ヨーロッパ南部からトルコ・中央アジア・チベット・中国東北部に分布し、本邦には迷鳥として北海道から沖縄まで各地で記録があるタカ科クロハゲワシ属クロハゲワシ *Aegypius monachus* は頭部に羽毛がなく、灰色の皮膚が露出している見た目で確かに正統に「禿げた鷲」であり、嘴も太く、鉤状になっていて先端部が黒いという、如何にもな、正統な「鵬」に属する種(♂で全長一・一〇メートル、翼開長二・五〇〜二・九〇メートルで、本邦で記録されたタカ科の鳥の中で最大である)があり、このクロハゲワシの旧和名は非常に困ったことに実は「ハゲワシ」だったという悩ましい過去の事実もあるのである。

『プリニウスの「博物志」三十卷四七章、亦、孕女の足下に、禿鷲の羽を置けば、出産を早める、と言た』前掲訳書でも『ハゲタカの羽』となっている。問題ない。広義の「ハゲタカ」に該当する現生種は二十三種おり、タカ科ハゲワシ亜科 Aegypinae には、ヨーロッパ・アフリカ・アジアに生息する十六種が含まれているからである。』

爰で、鷲を性慾と蕃殖に關して有勢の物とした話が、諸方に少なからぬに付て述べ置う。先づ、古希臘の傳説に、トロイ王トロスの子ガニメデス、艷容無双で、大神ゼウス、之に執心の餘り、鷲をして、取て天上せしめ、之を酒つぎ役の寵童とし、神馬二匹を、其父に償ふたという事で、歐洲の美術品に古來大鷲がこの少年を捉つて天上するところが多い。ローマで少年の美奴酒の酌を勤めるを、ガニメデス、それから轉じて、カタミツスと呼べり、英語で男色を賣る者をカタマイトといふ(スミス「希臘羅馬傳記神話辭彙」二、及び「エプスター大字書」)。ソラキア生れの名娼ロドピスは、曾て動物訓話作者イソップと共に、サミア人ヤドモンの奴たり。後ち、サミア人ザンデスの奴となり、埃及の大港ナウクラチスで、藝妓商賣をした。一日、此女、浴する間に、鷲がきて、其靴一つを攫み去り、埃及王が裁判しおる前に落した。王、其事の奇にして、其靴の美しきに迷ひ、持主を尋ねて息ず、遂に此女を探り當て、后とした。ロドピスは「頬赤」の義で、わが邦では、川柳にも「頬赤の匂比囊で防ぐ也」と有て好評ならぬ「やぶちゃん注」。「好評でならぬ」の意。北印度で韋紐神は金鷲に乗ると信じ、翼ある美童像もて其鷲を表はす所が、希臘のガニメデスに似おる「やぶちゃん注」ママ。』(一八四八年發行『ベンガル皇立亞細亞協會雜誌』一七卷五九八頁)。

「やぶちゃん注」。「韋紐神」「選集」のルビを参考にすれば、「ヴィシユニユじん」である。」

南印度のトダ人、傳ふらく、老嫗ムラツチの頭に、鷲が留まり、其より、此婆、孕み、男兒を擧たのが、コノドルス族の先祖、と。「羅摩衍」に高名な、猴王ハヌマンの緣起に、アヨジャー王ダシヤラタ、子なきを憂ひ、牲を供えて「やぶちゃん注…ママ。」禱るに、牲火中に、神、顯はれ、天食パノヤス「やぶちゃん注…神の食物の名か。」を授けて、其三妃に頒たしむ。其時、一妃の分を、鷲が掠め去て、アンジャニ女の手に落す。此女、亦、子なきを悲しみ、苦行中だつた。今、天食を得て、甚だ、喜び、之を食ふと、忽ち、孕んで、ハヌマンを生だ、とある。

「やぶちゃん注…『南印度の「トダ」人』インドのタミル・ナードゥ州にあるニールギリ丘陵（グーグル・マップ・データ）に居住する少数民族トダ族。

「羅摩衍」「選集」のルビを参考にすれば、「ラーマヤナ」と読む。」

所謂、金鷹は佛經の金翅鳥で、佛說に、昔し、ピナレ城に、タムバ、治世の時、釋尊の前身、金翅鳥王に生まれ、年、若し。一日、少年に化してピナレに往き、王と博戲するを、宮女蘿等、其美貌に見とれ、王后に語る。他日、化少年、又、往つて、王と博戲する時、后、盛装して入て見る。少年、亦、王后の麗容に驚き、忽ち、象牙の英語「やぶちゃん注…ivory。以下の「相惚れ」との洒落。」で相惚れときた。鳥王、乃ち、暴風を起し、天地晦冥、宮人、愕き、走り出るに乘じ、后を擱んで、自分が住む龍島につれ行て、之と淫樂し續く。王、其樂人サツガをして、遍く海陸に后を捜さしむ。サツガ、海商の船に乗つて、金島に渡る。船中の徒然を慰むる爲め、商人どもサツガに奏樂を勧めると、易い御用なれど、予が海上で奏樂したら、魚、驚いて、船を破るべし、といふ。一向、信ぜずに、強いられ、止を得ず、絃を鳴すに、魚類、大騒ぎし、其内の大怪魚一つ、飛揚つて、船に落ち、二つに破り了る。鳥王は、后を盗んで、飽く迄、之と淫樂し乍ら、知らぬ顔して、毎度、ピナレ王と博戲にゆく。此時も、丁度、其方へ行た留守中で、后は技癢「やぶちゃん注…自分の技量を見せたくて、うずうずすること。」の至りに堪ずと有て、所詮、女房にやもちやなざるまい杯と、うなりつゝ海濱に出歩く内、本夫に仕へた樂工が、船板を使いりに此島え「やぶちゃん注…ママ。」流れ寄た處へ、行合ひ、事情を聞き、猴にかき付れたんぢやないが、逢たかつたと、抱かれて宮中に歸り、十分、保養し、本復せしめ、美装・美食に手を盡して、之と淫樂し、「斯りける處え「やぶちゃん注…ママ。」亭主歸りけり」の警句を忘れず、注意して匿しおき、鳥王、出で行けば、又、引出して、サツガと歡樂した。斯て一月半の後、ピナレの海商、薪水を求めて、島に上りしに、便船して、王宮に戻り、鳥王、來つて、タムバ王と遊ぶを見、絃を鼓して、「王后、鳥王に盗まれ、海島にあり、自分、其島へ漂著して、飽く迄、王后と歡會した。」事を謠ふた。金翅鳥王、之を聞て、後の好淫、厭足なきに呆れ、怒り去て、后を伴れ來て、タムバ王に返し、再びピナレえ「やぶちゃん注…ママ。」來なんだ、とある。唐譯の、此譚は、これと、大分、差ふ。商船、難破して、商主、死し、其妻、一板を便り、海洲に漂著して、金翅鳥王の妻となり、其子を生む譚、あり。又、梵授王が、妙容女を妃とし、其貞操を全うせしめん爲め、

金翅鳥王に命じて、晝は、之を、海島に置き、一切、人間に見られざらしめ、夜は、之を、王宮に伴來たらしめ、天に在ては願わくは比翼の鳥と契りし内、速疾てふ名の樂工が、サツガ同然の難に逢て、其島に上り、王妃に通じ、共に、鳥王を欺き、王宮え「やぶちゃん注…ママ。」つれ歸り、姦通の事、露はれて、阿房拂ひになり、賊難に遇て、妃は、賊魁の妻になり、情夫、速疾を殺し、種々と、淫婦に、ありたけの醜行を重ねた後ち、野干の謀に遭ひ、恆河に浴して、改心、易操「やぶちゃん注…意味不明。」したと稱し、再び、王に迎へられて、大夫人と成た次第を述べある。其から、本邦の羽衣傳説に似た希臘の神話、有て、女神アフロジテが、川に浴するを、其甥ヘルメス神が垣間見、鷺をして其衣を攘め去しめ、「望みを叶へたら、返しやる。」とて、之に通じたといふ。セストス市の少女、鷺を育つると、毎度、鳥類を捉へ來たり、返禮した。少女、死して、屍を焼く火中に、鷺が投身して、殉死し、市民、碑を建て、之を旌表「やぶちゃん注…人の善行を褒めて、世に広く示すこと。」したと有て、何にしろ、鷺は、美童や婦女ずきとされた物だ（一九〇六年板、リヴァース「トダ人篇」、一九六頁。一九一四年、孟買板、エントホヴェン「グジャラット民俗記」、五四頁。カウエル「佛本生譚」、三卷三六〇語。「根本説一切有部毘奈耶雜事」、二九。一八七二年板、グベルナチスの「動物志怪」、二卷一九七頁。プリニウス「博物志」、十卷六章）。

「やぶちゃん注…『リヴァース「トダ人篇」、一九六頁』イギリスの人類学者・民族学者・神経内科及び精神科医であつたウィリアム・ホールズ（ハルセ）・リヴァース（William Halse Rivers 一八六四年～一九二二年）が書いたトダ族の民族誌 *The Todas*。彼は一九〇一年から二〇〇二年にかけて六ヶ月ほど、トダ族と交流し、彼らの儀式的社会的生活に関する驚くべき事実を調べ上げ、本書はインド民族誌の中でも傑出したものと評価され、専門家からも人類的な「フィールド・ワークの守護聖人」と称讃された（[英文の彼のウィキに拠った](#)）。「[Internet archive](#)」で原本が読め、[ここ](#)が当該部。「孟買」「ボンベイ」。

鷺と子孫繁殖を連ねた信念は古羅馬に在た。アウグスツス帝がリヴィア・ズルシルラを娶つた直後、鷺が白牝鷄を後の前垂れに落し、其牝鷄が月桂枝を銜み居た。トふと大吉兆と知れ、其枝を植ると大森林となり、牝鷄を畜ふと大繁殖した。因て其所を牝鷄莊と號した。ネロ帝の末年、其鷄、皆な、死に、月桂林は萎み亡せたので、「帝統、絶ゆべし。」と知た想な。鷺に掴み去れた幼児が名人となり、或は著姓の祖と成た例、日本に少なからず奈良大佛の創立者良辯僧正、攝州高槻の鷺巢見氏の祖等だ。印度にも大王の后となつた太陽姫（スリア・バイ）は、貧な牛乳搾り女の娘で、一歳の時、老夫婦の鷺に捉去られ、其巢で養はれたといふ。（グベルナチス、二卷、一九六頁。「元亨釋書」本傳。「翁草」三。一八六八年板、フレール「デッカン舊日譚」六章）。

「やぶちゃん注…『グベルナチス、二卷、一九六頁。』この部分は「選集」では『グベルナチス、一巻一九六頁。』となっているの、[「Internet archive」](#)で調べたところ、**第二巻で正**

しいことが判明した。[ここ](#)である。そこには確かに、「アウグストゥス家の繁栄の瑞兆として、嘴に月桂樹の枝をくわえた白い雌の鷲鳥、リヴィア・ドルシッラの膝の上に落ち、その枝が植えられ、鬱蒼とした月桂樹の森林と成った。牝鶏は非常に多くの子孫を産んだことから、この出来事が起こった別荘は「雌鶏別荘」(Villa of the Hen)と呼ばれるようになった。」とあって、「ネロの生涯の最期の年、鶏は、総てが死に、月桂樹もまた、総て枯れた。」とあるから、間違いない。この平凡社に「選集」は、総てが、原本に当たって厳密に検証されて校訂されているわけではない(今まで何度も煮え湯を飲まされて、延々、徒労の探索をさせられたりした経験がある。専門家が校訂編集している訳ではないと覚悟された方がよく、例えば、総ての漢文部は、全部が本文(白文・訓点附漢文)なしで訓読されてあるものの、この訓読、正直な感想を言うと、漢文の苦手な日本文学の大学生でも、こうは決して読まない、呆れるおかしな部分が、多々、見られるのである)ので、注意が必要である。」

一九〇九年板、ポムパスの「サンタル・パルガナス民談」、九六章は、雌雄の秃鷲が人の双生児を養ひ、二兒、歩み得る程に成て、高い木の上から、地に下し、「カーラゆえ「やぶちゃん注…ママ。」、アサンの下に残されて、夫婦の鷲に育てられつる」巡禮に御報謝を。」と、唄を教えた「やぶちゃん注…ママ。以下同じ」。蓋し、其母、カーラ果を集めに行て、林中で双生児を生だが、折角、取つた果物を、持還らずば、明日が過されず、子と果物と兩持ちすべき力も、なし。「儘よ。食ひさえ「やぶちゃん注…ママ。以下も同じ。多発する。」すれば、子は、又、出来る。運さえよくば、引還し来るまで、活きおれ。」
と云て、アサンの葉を二兒に被せおき、果物を負ひ歸つた間だに、秃鷲夫婦が取去て育て上たのだ。扱、二兒がひよろつき乍ら、件の唄を張上げ、村に入て乞食すると、ちつとの物になるを、巢に持歸つて、生活した。秃鷲、かねて、二兒に教えて、其親の住村え「やぶちゃん注…ママ。以下も同じ。」、往ざらしめた。一日、二兒、乞食に出で、「なんと、鷲が『往くな』と云た方え、往てみようでないか。」と、相談、決して、彼村へ行き、唄ひ廻り、生みの兩親の家え、くるを、見れば、小さい巡禮、「ドレドレ、御報謝進上。」と、盆に、しらけの志、イヨーと、懸け聲迄は書いてみないが、其母親が、お弓もどきに出て聞くと、唄は根つから吾が事なり、彌よ、尋ねて、吾子と知れ、大悦びで、夫と共に、二兒を大籠にふせおいた體、恰も、安珍を道成寺の鐘下に匿した如し。秃鷲は執念深いからどうせ只はおくまい、ドウモ安珍ならぬと案じたのだ「やぶちゃん注…「安心」に引つ掛けた洒落。」。果して、秃鷲、此家え、舞ひ來たり、屋根を穿つて、飛び入り、籠を覆へして、二兒を捉へた。父母も、「やらじ。」と二兒を執へ、エイ聲出して引合ふたので、二兒の體が、二つに割れ、父母は、泣く泣く、手に留つた半分の屍骸を、火葬した。秃鷲も、片割れの死骸を持歸つたが、自分が育てた者を、食ふに忍びず、火葬の積りで、巢に火を掛ると、焼けおる「やぶちゃん注…ママ。」屍骸から、汁が逆しり、其口に入た。それが無上に旨かつたので、焼いてしまふは惜い物と、残つた屍骸を引出して食たのが、この鳥人屍を食ふ濫觴だ、といふ次第を説た者である。誰も知る如く、パーシー人は、必ず、其

屍を、此鳥の腹に、葬る。

「やぶちゃん注…書名の中の「サントラル・パルガナス」は Santal Parganas で、インド東北部の地方名。[ここ](#)（グーグル・マップ・データ）。

「アサン」インド・ミャンマー・タイを原産とし、熱帯アジア大陸部に植生する高木落葉樹であるフトモモ目シクンシ（使君子）科 Combretaceae モモタマナ（桃玉菜）属クチナシミロ balan *Terminalia alata* 。[個人サイト「タイの植物 チェンマイより」の同種のページ](#)によれば樹高は二十〜三十メートルに達し、葉は単葉で、ほぼ対生し、長さ十〜十五センチメートルの楕円形を成す。本種の実は翼果で、五つの翼を有する。但し、『大きく』、『あまり遠くへは飛ばないで、樹下に落下していることが多い』とあり、「その他の名称」の項に『ヒンディー語・ベンガル語 Asan』、『英名 Asan Burma laurel』とあって、この「アサン」は現地での正統な名であることが確認出来る。また、『**仏典の植物** タイ語 HP には本樹はバリー語名アッチュナと』あるとされ、『そして「**仏典の植物**」（満久）には『本樹は梵語名アサナ漢訳仏典名一阿娑那（あさな）と』、『記載されている』ともあった。「お弓」母と娘の関係から浄瑠璃「傾城阿波の鳴門」の母「お弓」（娘は「おつる」）のことだろう。

「パーシー人」ヒンディー語で、「パールシー」「パールスイー」と音写される、インドに住むゾロアスター教の信者を指す語。』

歐・亞共に、獸畜が、人の子を育て上げた譚、多し。アタランタが牝鹿に、シグルドが牝熊に、ロムルスとレムスの双児が牝狼に乳せられ、后稷が牛・羊に養はれ、楚の若穀於擇が牝虎に育てられた杯だ（コックスの「民俗學入門」、二七五頁。スミス「希臘羅馬傳記辭彙」。「琅邪代醉編」七）。こんな例、今もなきに非ざれば、鷲や禿鷲が食ふ積りで捕へ去た人の兒を、子細有て食はず、其内、慈念を生じて、養ふ處を、人が見付け、救ふて、己れの子とするは、丸で無い事でないと惟ふ（一八八〇年板、ボールの「印度叢榛生活」、四五七頁以下。大正三年正月『太陽』、拙文「虎に關する史話と傳説、民俗」第四節「やぶちゃん注…後の資料は「選集」のものを参考にして追補してある。）。此一事は、「鷲が、人間繁殖に關し、力あり。」と信念の唯一の源因たらぬ迄も、大に之を強めたは争ふべからず。

「やぶちゃん注…「アタランタ」ギリシア神話に登場する女性の英雄で、俊足の美貌の女狩人として知られるアタランター（ラテン文字転写：Atalanta）であろうが、[当該ウィキ](#)によれば、彼女は**牝熊**に乳を与えられている。そこに、また、『アタランターは』『カリュドーンの王子』『メラアグロスと關係を持っていた。彼女は後にバルテノパイオスを産み』、『バルテニオン山に捨てた。このとき』、『テゲアー王アレオスの娘アウゲーもヘーラクレスの子を捨てており、牧人たちは』二『人の赤子を拾って養育し、前者をアタランターが処女を装ってバルテニオン山に赤子を捨てたことからバルテノパイオスと名づけ、後者の子を牝鹿』(👉)『が養っていたことにちなんでテーレポスと名づけた』という話と熊楠

は混同したものかも知れない。

「シグルド」不詳。ゲルマン神話に登場する戦士ジークフリート（ドイツ語: Siegfried）は古ノルド語では「シグルズ」（Sigurd）であるが、彼のことか。しかし、彼が熊に乳を受けたという記述は、ネット上には見つからない。

「后稷」[当該ウィキ](#)によれば、『伝説上の周王朝の姫姓の祖先。中国の農業の神として信仰されている。姓は姫、諱は棄、号は稷。不畜の父。后稷はもともと棄』『捨てられし者という名であったが、農業を真似するものが多くなってきたため、帝舜が、農業を司る者という意味の後稷という名を与えたとされている。后稷の一族は引き続き夏王朝に仕えたが、徐々に夏が衰退してくると、おそらくは匈奴の祖先である騎馬民族から逃れ、暮らしていたという』。「史記」の「周本紀」に『よれば』、伝説の聖王『帝嚳』（こく）『の元妃（正妃）であった姜嫄』（きょうげん）『が、野に出て』、『巨人の足跡を踏んで妊娠し』、『一』年して子を産んだ。姜嫄はその赤子を道に捨てたが、『牛馬が踏もうとせず、林に捨てようとしたが』、『たまたま山林に人が多かつたため』、『捨てられず、水の上に捨てたが』、『飛鳥が赤子を暖めたので、不思議に思って子を育てる事にした。棄と名づけられた』。「山海経」の「大荒西経」に『よると、帝俊』（しゅん）『（帝嚳の異名とみなす説が有力）の子とされる』。『棄は成長すると、農耕を好み、麻や菽を植えて喜んだ。帝の舜に仕え、農師をつとめた。また后稷』、『の官をつとめ、邠』（たい）の地に『封ぜられて、后稷と号した』。「魏志」の「東夷伝」の「夫餘」には、『昔、北方に高麗の国というものがあつた。その王の侍婢が妊娠した。（そのため）王はその侍婢を殺そうとした。（それに対して）侍婢は、『卵のような（大きさの）霊気がわたしに降りて参りまして、そのために妊娠したのです』といった。その』後、『子を生んだ。王は、その子を溷』（こん）『（便所）の中に棄てたが、（溷の下で飼っている）豚が口でそれに息をふきかけた。（そこで今度）馬小屋に移したところ、馬が息をふきかけ、死なないようにした。王は天の子ではないかと思つた。そこでその母に命令して養わせた。東明と名づけた。いつも馬を牧畜させた。東明は弓矢がうまかつた。王はその国を奪われるのではないかと恐れ、東明を殺そうとした。東明は南に逃げて施掩水』（しえんすい）『までやってくると、弓で水面をたたいた。（すると）魚鼈が浮かんで』、『橋をつくり、東明は渡ることができた。そこで魚鼈』（ぎょべつ）は、『ばらばらになり、追手の兵は渡ることができなかつた。東明はこうして夫餘』（紀元前一世紀から紀元後五世紀に満州北部（中国の東北部）に存在した国。「扶餘」）とも書く。住民はツングース系の狩猟農耕民族で、一世紀から三世紀半ば頃までが全盛期で、東満州・北朝鮮一帯に発展したが、後、高句麗や鮮卑（せんび）に圧迫されて衰え、四九四年、勿吉（もつきつ）に滅ぼされた）『の地に都を置き、王となった』とある』。一方、「史記」巻四の「周本紀」には、『周の後稷、名は棄。其の母、有邰氏の女にして、姜原と曰う。姜原、帝嚳の元妃と為る。姜原、野に出て、巨人の跡を見、心に忻然として説び、之を踐』（ふ）『まんと欲す。之を踐むや、身』、『動き、孕める者の如し。居ること』、『期にして』、『子を生む。不祥なりと以為』（おも）い、『を隘巷』（あいこう）裏通

り)『に棄つ。馬牛過る者』、『皆な』、『辟』(さ)『けて』、『踐まず。徒』(うつ)『して』、『之を林中に置く。適會』(たまたま)、『山林』、『人』、『多し。之を遷』(うつ)『して』、『渠中の氷上』(溝の中の氷が張ったその上)に『棄つ。飛鳥、其の翼を以て』、『之を覆薦』(ふくせん)『覆つて敷いてやること』『す。姜原』(きょうげん)『以て』、『神と為し、遂に收養して長ぜしむ。初め』、『之を棄てんと欲す。因りて名づけて棄と曰う』と』あって、『牛馬が避け、鳥が羽で覆つて守った、という后稷の神話が記載してある。内藤湖南は、夫余』(「夫餘」と同じ)『と后稷の神話が酷似していることを指摘しているが、「此の類似を以て、夫餘其他の民族が、周人の旧説を襲取せりとは解すべからず。時代に前後ありとも、支那の古説が塞外民族の伝説と同一源に出でたりと解せんには如かず」といい、同様の神話が、三国時代の呉の康僧会が訳した』『六度集経』にも『あることを指摘し、「此種の伝説の播敷』(はふ)『広める)』も頗る広き者なることを知るべし』とする』とある。熊楠は「牛・羊に養はれ」たとするが、以上を読むに——鳥に養われた——とするのが、適切である。

「若穀於擇」「じゃくこくおたく」(現代仮名遣)と読んでおく。「擇」の字は不審だが、これは、春秋時代の楚の公族で宰相(令尹(れいいん))であった鬬穀於菟(とうこくおと)とうこうおと 生没年不詳)のことである。ウイキの「鬬穀於菟」によれば、は『姓は芊』(び)、『氏は鬬、諱は穀於菟』(「穀」は「乳」の、「於菟」は「虎」の意)、『字は子文。楚の君主の若敖』(じゃくごう)『の子の鬬伯比の子。清廉で知られ、楚屈指の賢相といわれる。以下、子文の名で記す。』『鬬伯比が鄆子』(うんし)『の娘と密通して、子文が生まれた。娘は子文を雲夢沢』(うんむたく)『注に『現在の洞庭湖の北に広がっていた沼沢地の名前。現在は上流からの堆積物により埋没し、江漢平原となっている』とある)』の中に捨てたが、狩りに出た鄆子が虎に育てられた』(👉)『子文を見つけ、娘が育てることを許したとされる』。『紀元前』六六四『年、令尹に抜擢されると、私財を投じて楚の財政を救った。成王は、貧乏で食いつなげなくなった子文のために何度か俸禄を増やそうとしたが、そのたびに子文が下野し、取り消すと戻ってきたので、遂には諦めたという。代わりに、子文が登朝するたびに』、『肉の干物一束と朝飯一籠が贈られ、この習慣は』、『のちに楚の令尹に受け継がれていくようになった』。『弟の鬬子良の子の鬬椒(子越)が生まれた際に』は、『必ずこの子を殺しなさい。姿は熊や虎のようで、声は山犬や狼のようである。きつと我々、若敖氏に害をなすだろう』と言ったが、子良は聞き入れなかった』。『臨終の際には一族を集めて「子越が政治を執るようになったら、楚を離れて難を逃れるようにせよ」と遺言し、「若敖氏の靈魂は餓えることになるだろう」と泣きながら、若敖氏の滅亡を予言した』。『子文の死後、子越は予言された』通り、『名君莊王に叛いて』、『若敖氏を滅亡させた。しかし、莊王は「あの子文の家系が途絶えたとあっては、私は人に善行を勧めることができなくなる』と言って、国外にいて』、『乱に加担しなかった一族の鬬克黄に跡を継がせた』とある。

『コックスの「民俗學入門」、二七五頁』イギリスの民俗学者で「シンデレラ型」譚の研

究者として知られるマリアン・ロアルフ・コックス (Marian Roalfe Cox 一八六〇年～一九一六年・女性) の「民俗学入門」。[「Internet archive」の当該原本のほう](#)。
『スミス「希騰羅馬傳記辭彙」イングリランドの辞書編集者ウィリアム・スミス (Sir William Smith 一八一三年～一八九三年) の「ギリシャ・ローマ伝記神話事典」 (Dictionary of Greek and Roman Biography and Mythology)。

「琅邪代醉編」(ろうやだいすいへん・現代仮名遣) は明の官吏張鼎思ちやうていしの類書。一六七五年和刻ともされ、江戸期には諸小説の種本ともされた。

『ボールの「印度藪榛生活」、四五七頁以下』アイルランドの地質学者ヴァレンチン・ポール (Valentine Ball 一八四三年～一八九五年) が一八八〇年にロンドンで刊行した、[「Jungle life in India」](#) [「Internet archive」のこちらで原本の当該部が視認出来る](#)。狼に育てられた少年の話から入っている。

『大正三年正月『太陽』、拙文「虎に關する史話と傳説、民俗」第四節』「青空文庫」の南方熊楠「十二支考 虎に關する史話と伝説民俗」(新字新仮名) の「(四) 史話」が読み易いであろう。正規表現では、[国立国会図書館デジタルコレクションの『南方熊楠全集』第一卷『十二支考I』\(渋沢敬三編一九五一年乾元社刊\) のここから当該部を視認出来る。』](#)

第二篇 禹餘糧等について

支那の本草に、歐人の所謂、「鷲石」を、「禹餘糧」等に分類せる其區劃、諸家各説を異にして、判然せず。小野蘭山が「本草啓蒙」に説くところ、尤も分明と見受る。左に「和漢三才圖會」六一に「本草綱目」に出た諸家の説を折衷合考して摘要した文と、「重訂本草啓蒙」卷六なる蘭山の説を寫し出す。

「やぶちゃん注」：『小野蘭山が「本草啓蒙」に説くところ』[『「重訂本草啓蒙」卷六なる蘭山の説』事前に『小野蘭山述「重訂本草啓蒙」卷之六「石之四」中の「禹餘糧」・「太一餘糧」・「石中黃子」として電子化しておいた。](#)

『「和漢三才圖會」六一に「本草綱目」に出た諸家の説を折衷合考して摘要した文』こちらも、先行して『[「和漢三才圖會」卷第六十一「雜石類」の内の「禹餘糧」](#)』として電子化しておいた。なお、以上の二つで注したものは、ここでは、原則、省略するので、必ず、それらを見られたい。』

本綱、禹餘糧、會稽山中多出、彼人云、昔禹王會誓于此、棄其所レ餘食於江中、而爲レ藥、則名三禹餘糧、(篩草亦名三禹餘糧、乃草實也、同名異物也。) 生三池澤及山島、石中細粉如レ麩、黃色如三蒲黃、其堅凝如レ石者名三石中黃、其未レ凝黃濁水名三石中黃水、而三者一物。〔「本綱」〕禹餘糧は、會稽山の中に、多く出づ。彼の人、云はく、「昔禹王、此に會稽して、其の餘る所の食を、江中に棄つ。而して、藥と爲る。」と。則ち、「禹餘糧」と名づく。(「篩草」も亦、「禹餘糧」と名づく。乃ち、草の實なり。同名異物

なり。)池澤及び山島に生ず。石の中の細粉、麩のごとく、黄色にして、蒲黄のごとし。其の堅く凝りたるごとくなる石の者を「石中黄」と名づく。其の未だ凝らざる黄なる濁水を「石中黄水」と名づく。而して、三の者、一物なり。』と。」

蘭山曰く、『禹餘糧、和名イシナダンゴ、ハツタイイシ、ハツタイセキ、コモチイシ。舶來和産共にあり。舶來のもの、大き、一、二寸。殻の厚さ、一、二分ばかり。甚だ硬く、黄黒褐色にして、打破れば、鐵色あり。其内、空虚にして、細粉、盈てり。又、内に數隔ある者あり、薬には、此粉を用ゆ。所謂、「糧」也云々、其粉、白色或は青白色を良とす。又、黄色・黄白色なる者あり。和産は、和・能・甲・泉・日・薩・但・江・作諸州、筑前・越中、其餘、諸國にあり。』

本綱、太一餘糧、又名三石腦・禹哀^一、生三太山山谷^一、其石形、片片層疊、深紫色、中有三黄土^二也、其性最熱、冬月有三餘糧^一處其雪先消。〔「本綱」、『太一餘糧、又、「石腦」・「禹哀」とも名づく。太山の山谷に生ず。其の石、形は片々として層疊をなし、深紫色なり。中に黄土有りて、其の性、最も熱す。冬月、餘糧の有ある處、其の雪、先づ、消ゆ。』と。〕

蘭山曰く、『太一餘糧、イワツボ、ツボイシ、ヨロイイシ、オニノツブテ、フクロイシ、タルイシ、スズイシ。舶來、なし。和産、諸國にあり。形狀、大小、一ならず。大なる者は斗の如く、小なるものは桃栗の如し。禹餘糧の形に似て、外面、黄黒褐、雜色、質、粗くして、大小の砂礫、雜はり、粘する事、多し。「雲林石譜」に『外多粘綴碎石^二』〔外に多く碎ける石を粘綴す〕と云ふ、是也。其殻、堅硬、打破る時は、鐵の如く、光、有り。裏面は栗殻色にして滑澤也。殻内は、空しくして、粉あり。黒褐色なる者、多し。又、黄褐色なる者もあり。全きものを用ひて、一孔を穿ち、粉を去て、小なる者は硯滴となし、大なるものは花瓶となす。凡そ禹餘糧・太一餘糧、共に、初めは内に水あり、後、乾いて、粉となり、久きをへて、石となる。其、桃・栗の大きさにして、内に石ある者、此を撼かせば、聲、有て、鈴の如し。故にスズイシと云ふ。太一餘糧は、泉・紀・讚・和、諸州、城州・木津邊の山にあり。其中、和州生駒山に最も多し。名産也。』

〔やぶちゃん注：「硯滴」は「選集」を参考に、「みづいれ」と訓しておく。〕

「花瓶」同前で「はないけ」と読んでおく。

「撼かせば」同前で「うごかせば」と読んでおく。』

「本草綱目」卷十に、數曰、石中黄并卵石黄、二石眞相似、其石中黄句裏赤黑、黄味淡微距、卵石黄味酸、个箇印印、内有三子一塊、不レ堪レ用、若誤餌レ之令三人腸乾^一。〔數曰はく、『石中黄并びに卵石黄は、二石、眞に相ひ似たり。其の石中黄は、句裏〔やぶちゃん注：区切られた内部の意か。〕は赤黒黄にして、味、淡く、微かに距なり〔やぶちゃん注：意味不明。〕。卵石黄は、味、酸く、个箇に印印として〔やぶちゃん注：意味不明。性質が高ぶっていることか。〕、内に子の一塊、有れば、用ふるに堪へず。若し、誤りて、之れを餌へば、人をして、腸を乾かしむ。』と。〕

蘭山曰く、『卵石黄は「饅頭イシ」・「ダンゴ石」・「ダンゴ岩」・「土ダンゴ」」。形、圓にして、大抵、大きさ、五、六分より、一寸許りに至る。又、長き者もあり。外は黄白色にして、細土を固めたるが如く、柔かにして、碎け易し。中心に黒紫色の餡ありて、饅頭を破たる状の如し。豊前中津・房州・氷上郡・防州・豫州・奥州津輕・伯・能・武、諸州、甲州・荒井村、其他、諸州に産す。

雑とこんな者だが、蘭山説も、一寸、解しにくい所なきに非ねば、熊楠、古人が集めた標本を多く藏するに、見比べて、蘭山説を概要して申さば、禹餘糧は、全體を通じて、同質の堅い石で、太一餘糧も堅いが、多くの小石と砂粒が混在せるもの故、全體、同一質でない。卵石黄は、上述、田邊附近、岩屋山の「饅頭石」等で、石が柔らかく、脆くて、固まつた細土の如く、中に黒紫色の餡あり。禹餘糧も太一餘糧も、未成の物は中に黄みを帯びた濁水あり、之を「石中黄子」と名づけ、三升迄、のむと、千年まで生き延びる、と「抱朴子」十に出づ。其水、おひおひ、砂、又、細土となるを、「石黄」と名づける。彩色に「石黄」といふは是れか。其後、益す固まつて石となり、外を包んだ石と離れて、外の石をふれば、ガラガラ、鳴るを、日本で「鈴石」と名く。「譚海」九に、駿州富士郡傳法村住、吉川氏の先祖は、富士の牧狩に頼朝に供奉したそう、百五十年程前、大風が、宅後の大木の楠を吹倒した。其跡より出た石槲を開くと、徑七、八寸ほどの石のみあり。其石、真中に、穴、有て、内に丸い石を含み、ふると、鈴の音に違はず、「鈴石」と號し、秘藏し、事ある毎に、祈れば、驗あり。近年は、石の靈、漸く薄らいだ物か、驗、稀に成た、とあり。惟ふに、昔しは、鈴石の、よくなるものを、鈴の代りに、神前杯で用ひ、年久しく成て、アフリカ人のフィチシュ如く、靈、有て、人を助く、と信じたところも、日本に有たらしい。

「やぶちゃん注『譚海』九に、駿州富士郡傳法村住、吉川氏の先祖は、……」同篇は事前に「譚海 卷之十一 駿州吉川吉實家藏鈴石の事 / (フライング公開)」しておいた。前に同じくそちらで注したものは、ここでは、省略するので、必ず、それらを見られたい。「フィチシュ」音写が不審だが、英語の *witch* で「女魔術師」「シャーマン」のことか。」

禹餘糧、太一餘糧、共に、夏の禹王と其師太一が食ひ残した穀粉の化石と見立ての名だ。石の中にある砂や土が、穀の粒や粉に似居るからだ。他に草をも禹餘糧と名づく、とある。藪草は、本邦の本草家が海濱に多いフデクサ、一名ハママギに當るが、當否を知らず。凡そ諸邦に、或る箇人の飲み食ひの残分が、化石し、若くは、不斷、ふえ増し、嫩くは常存し、又、代々、相嗣ぎ生じて亡びないと信ぜらるゝ例、多し。少々述てみやう「やぶちゃん注…ママ。」

「やぶちゃん注…藪草は、本邦の本草家が海濱に多いフデクサ、一名ハママギに當るが、當否を知らず」『和漢三才圖會』卷第六十一「雜石類」の内の「禹餘糧』で注したが、これは言っておくと、誤りである。これは単子葉類植物綱カヤツリグサ科スゲ属コウボウムギ *Carex kobomugi* の異名であり、「筆草」(フデクサ) はコウボウムギの異名である。而

して、イネ科の多年草である「ハママギ」は、単子葉植物綱イネ科エゾムギ属ハママギ *Elymus dahuricus* var. *dahuricus* であって、全くの別種である。」

一八五二年カルカタ刊行、『ベンガル皇立亞細亞協會雜誌』第廿卷二四四頁に、ギルフォード大佐曰く、印度、タムラチレー山に、最大種の稷の大きな細石、多く、鹿挽きの小麦粉に似おる「やぶちゃん注…ママ」。土俗、傳へいふ、昔し、大天、十二年の不在中、天妃、毎日、食を調のへて、一年、俟つても、まだ見えぬ、十年、俟つても、まだ見えぬ、と、きたので、毎夜、捨て続けたのが、此石と化した、と。之を研ぎ、穴あけ糸を貫いて、千粒、一ルピーの割で、賣り、薄黄色だから、タムラ（真鍮）と呼び、巡禮の輩、至つて之を尊ぶ、と。支那では、建中の石粟は、諸葛武侯が馬を飼つた残りの粟の化するところといひ、江西の洞中の石田にある石稻も似た者らしい（『淵鑑類函』二五。「大清一統志」二〇六）。日本には「播磨風土記」に、天日槍命（あまのひばこのみこと）、韓國より來り、到_二於_一宇頭川底_二而乞_三宿處於葦原志舉乎命_二云々、志舉乎即許_三海中_一、爾時客神以_レ劍攬_三海水_二而宿_レ之、主神即畏_三客神之盛行_一、而先欲_レ占_レ得_レ國、巡上_二到_三於粒丘_一而食_レ之。於_レ此有_二口落粒_一、故號_三粒丘_一、其丘小石皆能似_レ粒。〔宇頭の川底に到りて、宿處を葦原志舉乎命に乞ふ云々、志舉乎、即ち、海中に許す。其の時、客の神、劍を以つて、海水を攪きて、之れに宿る。主の神、即ち、客の神の盛んなる行ひを畏みて、先に國を占めんと欲し、巡り上りて「粒丘」に到りて、之れを食ふ。此に於いて、口より、粒、落つ。故、「粒丘」と名づく。其の丘の小石、皆、能く、粒に似たり。〕粒丘はイヒポノヲカと訓む。神の口より落た飯粒が化石したのだ。「諸國里人談」三には、周防の水上山は、昔し、毎年二月十三日、「北辰尊星の祭」有て、千種百味を備え「やぶちゃん注…ママ。」、日本第一の靈驗ある大祭だつた。「運の祭り」とて、多々良家、千餘歲續き祭つた内は、年毎に、星が降つた。天文十八年より、降り已み、（二年後に）義隆、亡び、祭は斷絶した。昔しの祭供、土石と成て、地に埋もり、米石餅・土饅頭あり。掘出して、流行病を防ぎ、瘡を落すに妙なり、と見ゆ。伊賀の淨福寺邊に、大きな集合岩あつて「御飯石」と呼れ、異僧が炊いだ飯の化石といふ。信濃飯綱山近く、黴菌土あつて、味、麥飯の如く、食用すべし。「餓鬼の飯」と呼ぶ。越中新川郡の糟岩は、昔し、長者、酒糟を捨てたのが、此岩と成たとて、神と崇め、祭禮の時、「南無糟明神」と唱ふる由。（藤澤君の『日本傳説叢書』伊賀の卷、二二二頁。同、信濃の卷、五九頁。「越中舊事記」上）。

「やぶちゃん注…「建中」後の対表現から地名としか思われないので、調べたが、この地名は見つからなかつた。そこで『漢籍リポジトリ』で『淵鑑類函』の第二十五卷を調べたところ、熊楠の誤りであることが判つた。「洞一」の[1030-28a]及び[1030-28b]の箇所を見られたいが、「黔中郡南石崖屹立傍有石洞深數丈相傳諸葛亮征九溪蠻嘗過此留宿洞中設一牀懸粟一握以秣馬後遂化為石牀石粟至今」で、「黔中」が正しい。現代仮名遣で「けんちゅう」と読み、もと、戦国時代の楚の町の名で、後の秦代になって「黔中郡」が置かれた。沅江中流に位置し、現在の湖南省常德市（グーグル・マップ・データ）の西に相当する。

「イヒボノヲカ」底本では「イヒボノオカ」であるが（『選集』は歴史的仮名遣を廃しているため「イイボノオカ」で話にならない）、所持する岩波文庫「風土記」（武田祐吉編一九八七年刊）の「播磨風土記」に拠って特異的に訂した。

『諸國里人談』三には、周防の氷上山は、……『諸國里人談卷之三 土饅頭』は既に二〇一八年に電子化注しているので、見られたい。

「伊賀の淨福寺」三重県伊賀市古郡にある真言宗豊山派の寺。ここ（グーグル・マップ・データ）。

「餓鬼の飯」飯綱山はここ（グーグル・マップ・データ）だが、これは、長野県小諸市御幸町の天然記念物「テングノムギメシ」として知られるものと同じ。前注した「諸國里人談卷之三 土饅頭」の私の注を参照されたい。」

後魏の楊衒之の「洛陽伽藍記」五に、宋雲と惠生と正光元年（西暦五二〇年）乾陀羅國に入り、肉を割て鴿を救ふたで、名高い尸毘王の倉の焼趾をみるに、焦た粳米、今に在り、一粒を服すれば、永く瘡を絶つ。國民、禁日を須て之を取る、とあり（一九〇六年板、ピール「佛徒西域記」、第一卷一二五章）。印度より、支那を経て、日本に傳へた者か、日本、亦、昔し、焼けた倉趾から出る焼米石が熱病を治すという處あり（『郷土研究』第四卷第三號、中川氏の「白米城の話」）。

「山州名跡志」六に云く、毎歲六月十九日の夜、鞍馬寺の法事を左義長谷で行なふ。古は、正月、左義長の如く、竹を立て焼たり。中頃より、松明の如くして、焼く。傳て云ふ、多門天は、人道の衆生に福を授くる誓ひ有て、其福、満足せり。然し、衆生、諸煩に遮られて得るに由なし。故に、徒に朽るを以て、焼亡し給ふ。其相を擬して、衆生にみせしむ云々。大和志貴山、亦、此天の焼き玉ふとて、土中に焼米あり、そこを米尾といふ、と。

「やぶちゃん注」『山州名跡志』六に云く、毎歲六月十九日の夜、……『国立国会図書館デジタルコレクション』の『京都叢書』第十九卷（増補・昭和一〇（一九三五）年刊）のこちらで当該部が視認出来る（右ページ下段の「左義長谷（サギチャウダニ）」の項）。上野本文中の読みは、一部をそちらの記載とルビに従って変更・補填した。

「左義長谷」前注のリンク先の本文の頭にこの谷の位置を「樓門に向ふ巽の嶺に在り」（以上の原本では漢文訓点付き）とあるので、グーグル・マップ・データ航空写真で、[この中央から南東に延びる谷](#)ということになるか。」

唐の末、兵起つた時、山西の趙氏の女があによめ嫂と共に遁るゝ折から大旱りで、久しく行く内、喉が渴した。或人、見かねて米の洗ひ水を呉たのを、嫂は飲だが、其夫の妹は受けず。溝中に、ぶちあけて、渴死した。その溝の水は、今に、しろ水のように白いから、「漿中溝」と名づく。日本でも、若狭の大飯郡音海村の山下に、三の岩穴、各、常に水あり。一つは酢、一つは酒、一つは醤油の味、あり。野菜・海藻などに和して食へば、造釀のものと異らねど、魚・鳥を煮ると、味、必ず變る。弘法大師、こゝえ「やぶちゃん注」ママ。」來

たり、修行の時、造つたそうで「やぶちゃん注・ママ。」、「大師洞」と稱へる由（『大清一統志』一一〇。「若狭郡縣志」三）。故高木敏雄氏の「日本傳説集」二一〇頁に、飛驒の益田郡中原村の「孝行水」てふ小池は、路傍にあり。昔し、瀕死の父が、若い時、琵琶湖の水を飲んで旨かつたと思ひ出し、今一度、あの水を飲んで死にたいと云た。其子、孝心、篤く、直ぐ、出で立つて、琵琶湖へ「やぶちゃん注・ママ。」急行し、其水を持来り、見れば、父は死んで居た。大いに失望して、水を、器に盛つたまま、路傍に落し、そこが、忽ち、池となり、今に、増減・澄濁、みな、かの湖に應ずと云ふ。

「やぶちゃん注」若狭の大飯郡音海村」若狭湾湾奥の西部の岬の先端に福井県大飯郡高浜町（たかはまちょう）音海（おとみ・グーグル・マップ・データ航空写真）がある。

ずっと以前からお世話になっている齊藤喜一氏のサイト「丹後の地名」の「音海（おとみ）福井県大飯郡高浜町音海」のページで、この「大師洞」が岬の北の本当の先っぽの「音海断崖」（同前）にあることが判った。その「音海断崖」に、『内浦半島の先端にあり、北向き海岸で船で外海へ出ないことには見えない。壮大な海食崖という。「若狭国志」に「巖壁高サ数十丈、鷹鳥巢ヲ為ル。其下ニ巖洞有り、大師洞ト称ス。広大宛モ大堂ノ若シ」とあるように、押回鼻と今戸鼻の間約2kmにわたって最高260mの断崖が続く。安山岩質の岩石海岸が荒波により浸食されたもので、崖下には大師洞・十二艘洞など海食洞も多い。中でも十二艘洞は巨大で、高さ20m・奥行60mもあるそう』とあって、「高浜町誌」から引いて、『押回鼻には洞穴があり』、『大師洞という。洞中に三つの岩壺があつて醤油壺、醋壺、酒壺と海水の味が変わり泰澄大師が祀つてある』とあつた。ただ、これが現存するかどうかは、ネットで調べたが、場所が場所だけに、よく判らない。

「若狭郡縣志」国立国会図書館デジタルコレクションの『大日本地誌大系』第十三冊（大正六（一九一七）年刊）所収の同書を確認、この左ページの下段に「大師カ洞ツツ」とあるのがそれ。

『高木敏雄氏の「日本傳説集」二一〇頁』国立国会図書館デジタルコレクションで原本（大正二（一九一三）年刊）の当該部が視認出来る。附記もあるので、是非、読まれたら。』

一向宗徒は、越後の八房の梅を祖師の靈驗と崇む。親鸞聖人、鳥屋野に宿つた時、亭主馳走して鹽漬の梅を獻じた。聖人、食つて、核を取り、庭に投て、「我が教ゆる法が繁昌するなら、この核より、梅の木が生ぜよ。」と言た。後ち、果して、生え、其梅、千葉の紅花で、一朵に八顆あり、味ひ、やゝ鹹しといふ（『和漢三才圖會』六八）。「本草圖譜」五八に圖、白井光太郎博士の「植物妖異考」一に説明あり。「三度栗」、亦、「親鸞の靈驗」と云ふ。聖人、分田村を過る時、一婦、焼栗を持つて餽つた。上野の原で休む時、之を食ひ、餘りを、地に埋めて、「我法、後世に昌えなば、此焼栗、再生すべし。」と言た。不日に、芽を出し、今は林となり、歳に、三度、實のる、と（『和三』其他同前）。天武天皇にも同様の話あり、「宇治拾遺」に出づ。伯耆の後醍醐帝の「齒形栗」も同類異話だ。常陸

鹿島の社の側の栗林も、神の食ひ残しの焼栗より、生えた由（加藤咄堂「日本風俗志」三、新松氏「神道辯草」）。

「やぶちやん注」：『和漢三才圖會』六八』の親鸞の事績二つは所持する原本の当該部（「越後」地誌パート内の「當國 神社佛閣名所」の一節）から訓読（送り仮名や読みの一部は私に加えてある）したものを以下に示す。そもそも、この二つは、並置さえてある。なお、標題は原本では一行目冒頭からで（△もこれのみ、第一字目位置にある）、本文は全体が一字下げである。

* 八房の梅 同郡白川の庄小島村に在り。

親鸞聖人鳥屋野に止住ある時、民家に入り、亭主、饗應し、且つ、鹽漬梅を獻ずる。師、之れを吃して、核を採りて、庭園に投じて曰く、「教ふる所の法、如し、宜しく繁昌すべくば、乃ち、此の核、當に活生すべし。」と。果たして、言ふごとくに生へて、而も、其の梅、千葉の紅花、一朵に八顆有りて、味、稍、鹹く、人、以つて、奇と爲す。俗、之れを「八房の梅」と稱す。其の末孫、「小島の佐五助」と名づく。其の家、相ひ續く。三度栗 同郡上野が原に在り。

相ひ傳ふ、親鸞聖人、分田村を過る時、一婦、有り、焼栗を持ちて、塗に「やぶちやん注」道中に。「饋」「やぶちやん注」読みはママ。」くる「やぶちやん注」：「貴人に食事をすすめ供する」の意。安田村に至り、六字の名號を書きて、之れを賜ふ【其の名號、今、安田川の孝順寺に在り。】。休息し、彼の焼栗を吃し、餘る所を以つて、地に埋めて曰く、「我が法、後世、昌ならば、乃ち、焼栗、再生すべし。」と。不日に、芽を生じ、果して、今、栗林と成る【長さ八町「やぶちやん注」：厄八百七十三メートル。】、横十五町「やぶちやん注」：約一・六三六キロメートル。】許り。而も、毎歳、三度、子を結ぶ云云。

△按ずるに、常州、西念寺の前にも亦、此のごときの栗の林、有り。恐らくは、共に、是れ、後人の附會ならん。信州・總州・紀州熊野の山中に、栗、有り、俗、之れを「芝栗」と謂ふ。其の樹、甚だは喬からず、其の子、薄區に、小さくして、穀「やぶちやん注」：「穀」の異体字だが、「穀」の誤刻であろう。】、焦黒色を帶ぶ。【本草】に所謂る、「栴栗」【一名「茅栗」】の類、是れならん。鸞師、嘗て鎌倉の選舉に因りて、「一切經」を校合し、數千卷を紬繹して、悉く、大意を諳んず。其の智徳、以つて知るべし。而も自ら「愚禿」と称す。豈に華言を喜ばんや。然と雖も、億兆の祖と爲る。皆、必ず、天性の妙、有り。故に其の餘の靈異は、悉く、詰るべからず。

*

この後者の「三度栗」は、「譚海 卷之二 同國宿運寺古錢土中より掘出せし事并小金原三度栗の事」、及び、「北越奇談 卷之二 俗説十有七奇（パート6 其五「冬雷」・其六「三度栗」・其七「沖の題目」）」（そこでの私の注が本篇に最も合う。「八房の梅」も出てくる）、『南方隨筆』底本正規表現版「紀州俗傳」パート「六』では紀州熊野のそれへの言及がある。

『本草圖譜』五八に圖』江戸後期の本草家岩崎常正（天明六（一七八六）年〜天保一三（一八四二）年…号は灌園（かんえん）。幕府の徒士（かち）の子で江戸下谷三枚橋に生まれた。文化六（一八〇九）年に幕府に出仕した。本草学を、かの小野蘭山に学んだ）が文政一（一八二八）年に完成させた一大図譜で全九十六卷九十二冊。天保元（一八三〇）年から没後の弘化（一八四四）年にかけて出版した。外国産も加えた実に約二千種もの植物を収載する江戸時代最大の彩色植物図鑑である。モノクロームであるが、[国立国会図書館デジタルコレクションの画像のここが当該種](#)。筆頭標題は「[重葉梅](#)」とあって、以下に「ぎくんばい」「やつうめ」「やつぶさ」とあって、『越後の国の名産也。花千葉淡紅色。良香あり。一蒂』（ひとへた）』に初めよりは九実を結び、熟するに随て、二、三、実、残る』（句読点は私が振った）とある。

『植物妖異考』一に説明あり』[国立国会図書館デジタルコレクションの原本の当該部](#)を見られたい。九ページに及ぶ記載で、後半は植物学上の比定と学術的記載となっている。「和三」「和漢三才図会」。

『天武天皇にも同様の話あり、「宇治拾遺」に出づ』『宇治拾遺物語』の巻十五の第一話「清見原天皇與大友皇子合戦事」（清見原天皇、大友皇子と合戦の事）を指す。「[やたがらすナビ](#)」のこちらで、新字であるが、電子化されたもので読める。

『伯耆の後醍醐帝の「齒形栗」』『米子市』公式サイト内の「[安養寺の齒形栗](#)」を見られたこと。』

ナスロルラー・セムマンドは網打ちに長じ、沙漠の砂上に網打つても必ず魚を獲たといふ。予、曾て、ダマスクスより縁玉井（ペール・ゼムロッド）「やぶちゃん注…ルビではなく、本文。」に到つた時、巡禮輩、沙原中より、大小の魚、夥しく集め持ち來り、煮て食ひ、昔し、回祖が、ナスロルラー・セムマンドに、砂中に網打て取しめた魚の残りだと云た、と、エヴリア・エツフェンジが言た。或るマレー人は、ザンノイオは、回祖が豕を食ふを禁ぜぬ内、食ふた豕の残肉より生じたといふ。熊楠言く、是は、肉味が似たより言ふのだ。又、シサ・ナビ（回祖の残食）てふかれ鰈「やぶちゃん注…ルビはママ。」は、最初、體の兩側に、等量の肉、あつた。その一側を、回祖が食つて、残りを海に投入すると、蘇生して、今迄、繁殖したが、一側の肉、他側より多くて、扁魚と成り了つたといふ。西暦五世紀にカムボジアで活動した暹羅人ネアイ・ルオングが、クラン魚を食ふて残した頭と背骨斗り、それが、復活して、今に生きおる「やぶちゃん注…ママ」（一八七六年、ワータ―編纂、サウゼイ『隨得手録』二輯五二一頁。一九〇〇年板、スキート「巫來方術」三〇六頁以下。一八八三年、パリ板、ムラ「柬埔寨王國誌」二卷一三三頁）。支那では、吳王、江を渡る船中で、鱠を食ふた残りを、中流に棄てたのが、鱠片のやうな魚に化し、今にあり、「吳王鱠餘」とも「鱠殘魚」とも「王餘魚」とも名く。和漢とも、「王餘魚」を「かれ鰈」と心得た學者、あり。予は、その何書によつて立説したかを知ねど、支那の一部、亦、巫來人のシサ・ナビ同様、鰈を某王の殘食と云傳へる所があるのだ（「和漢三才圖會」五一。

「閩書南産志」二。「筠庭雜録」上に、陸次雲の「織志志餘」に、半面魚、相傳、越王食レ魚未盡、半棄^三海中^一、故其種止具^三半面^一。「半面魚。相傳ふ、「越王、魚を食ひて、未だ盡さざるに、半ばを海中に棄つ。故に、其の種は、止^ただ、半面を具^{そな}ふるのみ。」と。」但し、吳王、越王、又、寶誌和尚がことなり、とも、さまざまに言ひ、と。寧國府、琴溪に、一種の小魚あり。仙人琴高、藥滓を投じて化した、とて、「琴高魚」といふ。毎年、三月に、數十萬、一日に來り、集まるを、網で取て、鹽漬にし、乾し、土宜「やぶちゃん注」：「みやげ」（土産）と読む。「宜」は「宜」の異体字。」となす、と（「琅邪代醉編」八）。

「やぶちゃん注」：「ザンノイオ」話の流れから、食べた魚の一部を「残」して水中に投げ入れて生じたところ「の魚」などととっては誤りなので、注意が必要である。これは本邦での「人魚」の正体の第一番にモデル候補とされる、インド洋・西太平洋・紅海に棲息する哺乳綱海牛（ジュゴン）目ジュゴン科ジュゴン属ジュゴン *Dugong dugon* の本邦の生息域である奄美群島から琉球諸島にかけての方言。[ウィキの「ジュゴン」によれば](#)、『英名』*Dugong* 『はマレー語の『duyung』が』、『フィリピンで使われているタガログ語経由で入ったもので、『海の貴婦人』(lady of the sea) の意味だという』。なお、漢名「儒艮」はその音の当て字である。本邦の同地域で、『ザン』、『ザンヌイユ』・『ザンノイヨ』・『ザンノイユ』（ザンの魚）、「アカンガイ」・「アカングワーイユ」（アカングワーは赤ちゃん、イユは魚という意味）『などと呼ばれる』。『なお、「ザンヌイユ」を大和言葉化した「ざんいの」の語形もあって、「犀魚」の字をあてることもあるとされる』。『また、宮古列島には「ヨナタマ」・「ヨナイタマ」、八重山列島の新城島』（あらぐすくじま）『には「ザヌ」、西表島には「ザノ」の方言名があり』、『琉球王府公用語では「ケーバ」と呼ばれた』とある。辞書によつては、**南西諸島方言に「ザン」は動物の「サイ」（奇蹄目有角亜目 Rhinocerotidea 上科サイ科 Rhinocerotidae のサイ類。現生種は五種）の意と断定しているものが殆んどであるが、いかがなものか？** この場合の「犀」とは、中国から琉球王朝に入った書籍や談話から想像された実際には見たことがない「サイ」から転じた、自由な仮想獣「犀」の比喩モデルとすべきであるように私には思われる。無論、当時の日本本土の本草学者らは、[和漢三才圖會卷第三十八 獸類 犀（さい）](#)（[サイ](#)）を見るまでもなく、実際の「サイ」を情報としては知っていた。しかし、それを無批判に南西諸島のジュゴンを指す「ザン」と同じだというのは、寧ろ、安易で、非科学的であるように思われる。母音の口蓋化が起こる南西諸島で「サイ」を「ザン」と転訛するというのも、私には頗る怪しい気がしてゐるのである。私にも「ザン」の本来の意味は分からないが、少なくとも「犀」の音変化説には全く組み出来ないのである。

「鰈」北極海・太平洋・インド洋・大西洋の沿岸の浅海（種によつては汽水域も棲息可能）から水深千メートルの深海までに棲息する魚上綱硬骨魚綱カレイ目カレイ科 *Pleuronectidae* のカレイ類だが、昔の一般人が太平洋西部（千島列島、樺太、日本、朝鮮半島などの沿岸から南シナ海まで）に棲息するカレイ目カレイ亜目ヒラメ科ヒラメ属 *Paralichthys* を識別していたとは到底思われなから、それも含むとしておく。

「クラン魚」現在の当該種不詳。識者の御教授を乞う。

『和漢三才圖會』五一』私の「[和漢三才圖會 卷第五十一 魚類 江海無鱗魚](#)」の「しろいを 鱧殘魚」を見られたい。そこで私はこれを、キユウリウオ目シラウオ科 *Salangidae* に属するシラウオ類と比定している。なお、同巻の「かれゑひ きれい 鰈」も一緒に参照されたい。そこにも「王餘魚は、乃ち膾殘なり。」すなはという一文が出るからである。

「琴高魚」現在の当該種不詳。識者の御教授を乞う。」

日本では「筠庭雜錄」上に、吉野山藏王権現の堂より左の方、道程二十町「やぶちゃん注…約二・一八二キロメートル。」斗り行けば、谷間に亘り、十餘間「やぶちゃん注…二十メートル弱か。」の池あり。其内の鯉は、身、瘦て、扁たし、と。土人云く、昔し、義經、片身食ふて、池に放ちたるとぞ、と出づ。義經の兄頼朝は、江州淺井郡高山村の安明淵で、鯉をとり、片身の鱗をふき放せしに、今に草野川に存す、と。高野山蓮金院の覺弘の兒童、前なる池の魚をとり、焙つて奉りしを、加持すると、傍ら、焦げ乍ら、蘇り、池に放てば、本の如く泳ぎ、子孫、みな、半身、焦た様だ、と。或る東土旅行家の、カウカススより、黒海に流るゝ川の記に、此所え「やぶちゃん注…ママ。」、毎歳、無数の魚來るを、土民、捕へて、其片かわ「やぶちゃん注…ママ。」の肉を切り取り、食ひ、魚を放つと、明年、魚、復た、來つて、他の側の肉を捧ぐるをみるに、去年、切り取られた跡に、復た、肉を生じあり、と。行基大士、曾て、自分の生れた村にゆくと、村人、池の傍らに飲みおり「やぶちゃん注…ママ。」、鮒の鱠を、上人に奉つた。上人、齟で、池へ吐くと、夥しい小鮒と成て、數百年、繁殖したが、眼、一つ、なかつたと云ふ。其譯を知らぬ。播磨の腹辟沼はらひらは、上古、花浪神の妻淡海神が、夫を追つて、爰迄、來ても、埒明ず、怨み怒つて、自ら屠腹して、此沼に没した。其から、沼中の鮒に、五臟、なし、と傳へた。熊楠、謹んで案ずるに、近松門左、元祿十三年「やぶちゃん注…一七〇〇年。」作の「長町女腹切」は、其頃、大阪長町の伽羅細工師甚五郎の妻、其甥柄巻屋半七がお花てふメテレッツ「やぶちゃん注…女天烈」か。「女の奇天烈なる者」の謂いか。」に打込で起こつた椿事を苦し、み事、男のする切腹を、女の身でした始末を演た。それより二百八十三年前、應永二十四年「やぶちゃん注…一四一七年。」正月、上杉禪秀、敗軍して、鎌倉雪下で自殺の後、其妻、之を聞て、住國（甲斐か）藤渡の河邊で、守り刀で、腹、十文字に切つて、水中に沈む。女、腹切る事、古今不思議に聞えし。辭世の歌に「さなきだに五つの障りありときく 親さへ報ふ罪いかにせん コラサイ」と。熊楠、又、案ずるに、此夫人の父武田信滿は婿禪秀に加勢し、敗軍して、甲斐に歸り、上杉憲宗に伐たれ、衆寡、敵せず、同年二月、自殺したから、娘が親さへむくふ、と詠んだのだ。然し、此上杉夫人より、ズツトむかし、神代、既に、淡海神が切腹した上、五臟を掴み出したればこそ、此女神が、沈んだ沼の鮒は、後世まで、五臟なし、と云ひ傳えた「やぶちゃん注…ママ。」ので、迥か下つて、九郎判官や、佐々成政が、剖腹して、腸を繰出し、三好海雲が顯本寺の天井に、

腸を投げつけて死んだ等より、大分、ツリを取らねば成ぬ。だから、世に多い自殺ずきの男や、りんきで「死ぬ死ぬ」言通す女共は、専ら、此女神を開祖と仰ぐべしだ。扱、越中礪波郡やち川のぎこに、腸、なし。親鸞、京都で寂した後ち、此邊に在た俗弟が、偶ま、ぎこの腸を拔居つたが、此報に愕き、ぎこを、此川へ捨たから、今に腸なし、といふ（『近江輿地誌略』八六。「高野山通念集」六。一八九一年板、コプレイ「奇異な迷信」一七頁。「行基年譜」。「元亨釋書」一四。「播磨風土記」。「兩武田系圖」。「野史」一一一、一一五、一五二。「義經記」八。「川角太閤記」三。「越中舊事記」下）。

「やぶちゃん注」：「吉野山藏王權現」吉野山金峯山寺の秘仏金剛藏王大権現を祀る藏王堂（グーグル・マップ・データ）。

「十餘間の池」方向と堂からの距離からすると、この「菅原池」か（グーグル・マップ・データ航空写真）。但し、今はずつと大きい。

「江州淺井郡高山村の安明淵」「草野川」現在の滋賀県長浜市高山町（グーグル・マップ・データ）。同町内北部に、東俣谷川（ひがしまたにがわ）と西俣谷川が流れ、それが南部で合流して草野川となる（同拡大図）。「安明淵」は不明だが、「草野川」に現存すると言っており、通常、淵が出来そうなのは、まず、上流二川の合流点、及び、そこを下る直下部分であろう。そのすぐ下流には、堂來清水（白龍神社）と白竜神社があり（グーグル・マップ・データ航空写真）、何となく、それっぽい雰囲気はある。

「高野山蓮金院」ここ（グーグル・マップ・データ）。

「兒童」僧附きの稚児。

「カウカス」コーカサス。コーカサス山脈の中央附近（グーグル・マップ・データ）。

「行基大士」別な場所での行基の逸話に、「諸國里人談卷之五 片目魚」（私のブログ電子化注）がある。なお、余りに多過ぎるので、逆に示し難いのだが、既に分割で電子化注を終えている柳田國男（リンク先は私のブログ・カテゴリ）の「一目小僧その他」の「一目小僧」の中には、夥しい片目の魚の話が語られてある。例えば、『柳田國男「一目小僧その他」 附やぶちゃん注 一目小僧（十一）』の後半を参照されたい。

「自分の生れた村」行基の生地は河内国大鳥郡で、現在の大阪府堺市西区家原寺町（いえばらじちよう…グーグル・マップ・データ）である。

「播磨の腹辟沼」信頼出来る資料によれば、兵庫県小野市三和町に嘗てあった沼らしい。「花浪神」「妻淡海神」サイト「神魔精妖名辞典」のこちらによれば、『播磨国風土記』に見える神。同訓で「花波之神」とも記す。近江の国の神とされ、花波山はこの神が鎮座するが故にそう称するという。妻は淡海神で、淡海神は花浪神を追って来たが、『遂に』『会えず、自分の腹を割き』、『沼に身を投げて死んだと伝わる。兵庫県多可郡多可町』（たかちよう）『にある「貴船神社（きぶねじんじや）」』（グーグル・マップ・データ）を見ると同町内には分祀されて四ヶ所ある）『は現在』、『高麗』神（たかおかみのかみ…『日本書紀』）にのみ出る水神で、伊邪那岐命が妻の死の原因となった火之迦具土神を怒って斬つた際、その飛び散った血から生まれた神の一柱とされる）『を祭神とするが、古来は「花

の宮」と称し、『花浪神を祀っていたとされる』とあった。

「三好海雲」戦国武将三好元長（文亀元（一五〇一）年〜享祿五（一五三二）年）の法名。三好之長の孫。阿波の国人。大永六（一五二六）年、細川晴元を補佐して拳兵、翌年、管領細川高国を京都から追い出し、足利義維を立てて、和泉国堺に公方府を開いた。享祿四年、再起を謀った高国を滅ぼしたが、忠誠心を疑った晴元の策謀により、本願寺の一揆軍に包囲され、堺で自害した。

「顯本寺」大阪府堺市堺区宿院町（しゆくいんちやう）に現存する法華宗本門流の常住山（じやうじゅうざん）顯本寺（けんぼんじ）：グーグル・マップ・データ）。

「越中礪波郡やち川」富山県砺波市寺尾（グーグル・マップ・データ）の直近を流れる谷内川。「ひなたGPS」の戦前の地図の方で「谷内」の読み「ヤチ」が、国土地理院図で川名が確認出来る。」

高野山御廟橋は、有罪者、渡り得ずとか。處が、大正十年十一月、予、爰で見居ると、殺生、犬をつれ、鐵砲を肩にし、橋の上で、屁を、三つ、放つて、行く者を見、其體を畫いて、座主に覽せた。此橋の下に住むハエは、みな、背に孔ある、といふ。昔し、此魚を捉え「やぶちゃん注」ママ。」、焼きおる「やぶちゃん注」ママ。」處え「やぶちゃん注」ママ。」、弘法大師が来て、其惡業たるを諭した故、放つたら、串の跡が残つたとか。實はジオルダンとトムソンが、學名をレンキスクス・アトリラツスと付た者で、此田邊附近にも、どこにも、多く、特に色付られた背鰭が、孤立して、水中で孔のやうにみえるのだ。

「やぶちゃん注」：「高野山御廟橋」ここ（グーグル・マップ・データ航空写真。サイド・パネルで橋の画像が見られる）。

「座主」熊楠とはロンドンで際会以来、親しかった土宜（どぎ）法龍。

「此橋の下に住むハエ」（「ハヤ」に同じ）「レンキスクス・アトリラツス」何度もいろいろな記事で述べているが、再掲しておく、そもそも「ハヤ」という種は存在しない。

「大和本草卷之十三 魚之上 ※（※）＝「魚」＋「夏」（ハエ）（ハヤ）」を見ら

れたいが、その私の注から転写すると、本邦で「ハヤ」と言った場合は、これは概ね、

コイ科ウグイ亜科ウグイ属ウグイ *Tribolodon hakonensis*

ウグイ亜科アブラハヤ属アムールシノー亜種アブラハヤ *Rhynchocypris logowski*

steindachneri

アブラハヤ属チャイニーズシノー亜種タカハヤ *Rhynchocypris oxycephalus jouyi*

コイ科 *Oxygastriinae* 亜科ハス属オйкаワ *Opsarichthys platypus*

Oxygastriinae 亜科カワムツ属ヌマムツ *Nipponocypris sieboldii*

Oxygastriinae 亜科カワムツ属カワムツ *Nipponocypris temminckii*

の六種を指す総称である。この内、熊楠の属名の音写「レンキスクス」はアブラハヤ属 *Rhynchocypris* の綴りに似ているように見える。しかし、学名の命名者の中にしばしば見られる連名の Jordan & Thompson や synonym' 及び' それに *Rhynchocypris* を加えたフレーズ

検索を何度もかけて、海外サイトの学名のシノニムの記載一覧を見たものの、「レンキスクス・アトリラツス」に相当する種自体が見当たらなかった。私は淡水魚は、守備範囲でないため、熊楠の言っているこれ以上は何とも言えない。識者の御教授を乞うものである。二種の幾つかの画像を見ると、熊楠の言う色づいた背鰭で孤立しているというのは、印象的には、アブラハヤっぽい感じはした。」

「本草」に所謂、「卵石黄」は、卵に黄みあるに似たよりの名で、前篇に述べた田邊近所、岩屋山の「饅頭石」は、之に属す。甲州の團子山邊を、昔し、弘法大師が通ると、婆が團子を作り居た。一つくれ、といふを、断つたので、大師、大に立腹し、呪して、悉く、石にしたから、婆は、之を、宅後の山に捨てた。石は鶏卵の大きで、人工が及ばぬ程、よくできおり「やぶちゃん注…ママ。」、雪程、白く、すこぶる滑かで、破つて見れば、赤い米粒様の物、満つ。外用すれば、疱瘡を治すといふ。柳里恭「やぶちゃん注…りりうりきょう」。柳沢淇園の唐風名。」、其粉を水飛して、畫料とし、よい色がでたが、膠水に和し悪かつた由。常陸の足高で、坂の兩側の崖の砂中から、石饅頭を出す。眞圓くて、中空、普通のモナカの大きで、表の眞中に、小孔、あり。その周りに六角の花形、現はる。掘出した時は、至つて脆いが、空氣に觸れると、瀬戸焼の如く、固まる。昔し、此邊、泥海だつた時、足高觀音堂の門前の小屋で、饅頭を賣る翁あり。或暮方、乞食、來つて、「一つ施こせ。」といふと、「石饅頭だ。食れない。」と云た。「然らば、眞實の石に、してやらう。」と言って、乞食が去た跡で、饅頭、皆な、石となり、幾ら造つても、亦、石となる。據ろなく、之を棄てて、店を止めた。其時の饅頭が、今、砂から出るのだ、と。そして件の乞食は、弘法大師だつた相な（柳里恭「獨寢」。高木氏「日本傳説集」二二三頁）。こは「劍橋動物學」一卷二四一圖にみえる北米産サンド・ダラー如き蝟狀動物（本邦でタコノマクラ、サルノマクラ杯いふ類）の化石だらう。

「やぶちゃん注…「甲州の團子山」[サイター「YAMANASHI DESIGN ARCHIVE」](#)の「[團子石のページ](#)」に、この弘法大師のエピソードが載るが、ここでは『茅ヶ岳の麓』をロケーションとしている。茅ヶ岳（かやがたけ）は国土地理院図で示すと、[ここ](#)である。記載された当該場所はズバリ、[甲斐市団子新居（だんごあらい）](#)字団子石（だんごいし…グーグルマップ・データ）である。

「水飛」「水簸」とも書き、水中での固体粒子の沈降速度が、粒子の大きさによって異なることを利用し、粒の直径を二種以上に分離する操作を言う。陶土を調整したり、砂金から金を採取したりする際に行なう（小学館「日本国語大辞典」に拠った）。

「常陸の足高」現在の茨城県つくばみらい市足高（グーグルマップ・データ）であるが、「觀音堂」はそこから八キロ西北西の、[つくばみらい市鬼長（おにおさ）](#)にある「[觀音堂](#)」のことか（同前）。

「蝟狀」（いじやう／はりねずみじやう）「動物」「タコノマクラ、サルノマクラ」後の「タコノマクラ」「サルノマクラ」は棘皮動物門海胆（ウニ）綱タコノマクラ目タコノマクラ科

タコノマクラ属タコノマクラ *Clypeaster japonicus* を指す。英語の Sand dollar も同種の英名である。熊楠の言っているのは、本種を指していると考えてよいが、江戸時代以前の「タコノマクラ」は実は、タコノマクラ目ヨウミヤクカシパン科ハスノハカシパン属ハスノハカシパン *Scaphechinus mirabilis* 等の仲間を指しているケースが多く、逆に現在のタコノマクラをそう呼称しているケースは殆んどないので、本草書に出る場合は注意が必要である。例えば、私の『毛利梅園「梅園介譜」 蛤蚌類 海盤車・盲亀ノ浮木・桔梗貝・エンザヒトテ・タコノマクラ・海燕骨(キキヤウカイ)・総角貝 / ハスノハカシパン』を見られたら。』

或る食物、又、其持主や作り手を悪んで詛ふてより、其食物が廢物となつて今にありてふ信念も、大に弘まりおる「やぶちゃん注…ママ。」。例せば、弘法大師が、食ひ能はず、海の方へ投げた蕨が、石と成て、夥しく、阿波の或海岸に群がりあるといふ。之と反対な話は、羽州黒崎附近に、「黒崎の白蕨」てふ特異の物、生ず。昔し、法師に宿かした女が、海、荒て、和布を取り得ず、何を汁種にして旅僧をもてなすべきと思ひ煩ふをみて、僧云く、「爰へ來る路に、蕨、多かつた。あれで十分だ。」と。女、笑ふて、「蕨は、灰汁で、先づ、煮て、ぬめりを去ずば、食へず。中々、手のかかる物。」といふと、坊主、「そんな事は、ない。」と云て、山へ行て、一握、採り來たり、「灰を入れずに、すぐ、煮よ。」といふから、不審乍ら、煮ると、甚だ旨かつた。「斯る珍品を教示し玉ふは、弘法大師に相違なし。」と、人、専ら云た。それから今に、所の者が汁菜とする程の、灰汁入らずの蕨が生えるとの事。藝州新庄村と佐東村の界に、大木の桃一樹あり。南は新庄、北は佐東なり。この桃の南枝の果は、苦く、北枝のは、甘し。昔し、弘法大師、佐東で桃を乞ふに、「苦くて食へない。」と欺むいた。新庄の人は「甘い。」と言つて進呈した。故に一木乍ら、甘苦の果を分ち生ず、と。この田邊町より遠からぬ富田地方は、土地、豐饒だが、豌豆を栽ず。栽ると莢の中に、蟲、自づと、生じ、食盡すから、物に成ぬ。大師、豌豆を乞ひしに與え「やぶちゃん注…ママ。」なんだ罰といふ。又此邊で、「ズバイ桃は、毛桃より變成した。」といひ傳ふるは、今日、科學者の意見によく合ふ。だが、變成の道筋が甚だ非科學的に説かれおり「やぶちゃん注…ママ。」、弘法が來て、少しの毛桃を乞ふと、「あれはツバキの實だ。桃なものか。」と嘲り拒んだので、大師、「しからば、眞のツバキの實にしてやらう。」と言つて、去ると同時に、桃の毛、盡く落ちて、ツバキの實の様に成つたと云ふ。桃に取ては、毛を亡なふて、大損だが、毛桃が、ズバイ桃に成たつて、作り主に、何程の損になるか。其頃のズバイ桃は、全く食へぬ物で有たのか。一寸、分らぬ。何にしる、無毛の桃は、ツバキの實の様だから、ツバキ桃、それから、ズバイ桃、扱は、ズンバイ杯いふに至つたは争はれぬから、此村民の傳説は、道理に外れ盡しおらぬ「やぶちゃん注…ママ。」(藤澤氏「日本傳説叢書」阿波の卷、三八三頁。「眞澄遊覽記」「小鹿の鈴風」の卷。「諸國里人談」四。ド・カンドル「栽培植物起原」一八九〇年紐育板、二二七頁。「塵添壺囊抄」五の二三。「箋注倭名類聚抄」九)。

「やぶちゃん注…弘法大師が、食ひ能はず、海の方へ投げた蕨が、石と成て、夥しく、阿波の或海岸に群がりある」最後の参考文献に挙げてある『日本伝説叢書』の「阿波の巻」(藤沢衛彦編・大正六(一九一七)年)の国立国会図書館デジタルコレクションの原本の[この「蕨石\(わらびいし\)](#) (郡賀郡見能林村大字中林)」で視認出来る。そこに、このロケーションを、『中林村(なかばやしむら)』とし、割注で『今の見能林(ミノバヤシ)村大字中林の地』とあり、続けて、その村『の内、南林の高岳たかをかの東北の海岸に』その「蕨石」と呼ばれる『蕨の並び生へたやうになつてゐるもの』がある、とある。ここは、現在は徳島県阿南市中林町なかばやしちやうで、[ここ](#)である(グーグル・マップ・データ)。

『羽州黒崎附近に、「黒崎の白蕨」てふ特異の物、生ず』これは、同前の菅江真澄五十七歳の折りの男鹿半島に逗留した際の紀行文「小鹿の鈴風」文化七(一八一〇)年刊)が直接の出所である。[国立国会図書館デジタルコレクションの『秋田叢書別集』第一の「菅江真澄集第一」\(昭和五\(一九三〇\)年\)](#)の[ここで](#)当該部が視認出来る。なお、ネットの複数の記事を見るに、旧「黒崎の大明神崎」おおもつぎさき、現在の秋田県男鹿市北浦西黒沢地区にある岬が、このロケーションに比定されているようである。[「ひなたGPS」の](#)111)。

「藝州新庄村と佐東村の界」広島県広島市西区新庄町と広島市安佐南区の間と思われる。[この中央附近](#)(グーグル・マップ・データ)。この話は既に電子化注してある私の「[諸國里人談卷之四 枝分桃](#)」を参照されたい。

「富田地方」現在の和歌山県西牟婁郡上富田町及びその南・東・西部分。[「ひなたGPS」のこちら](#)を参照されたい。東西南北を頭に附した広域の旧富田村域が確認出来る。

「ズバイ桃」双子葉植物綱バラ目バラ科サクラ亜科モモ属モモ変種ズバイモモ *Amygdalus persica* var. *nectarina*。ネクタリンの標準和名。原産地は中国南部のトルキスタン附近の、桃の表面のうぶ毛が退化した変種で「油桃」ゆとうとも呼ばれ、本邦では、山梨県・長野県を中心に生産されている。桃よりもしつかりとした果肉で、酸味があるのを特徴とする。

「毛桃」モモの在来品種であるバラ科モモ亜科スモモ属モモ *Prunus persica* の異名。]

僧に物を乞れて與へなんだ話は、古くより有り。西行「撰集抄」に、延喜帝の末年、仲算大徳、早天に、近江の山中で、女が清水を汲んで、頭に戴き行くを見て、少しを乞しに、「聖僧、自ら、水を湧出せしめて、飲め。遠路を汲み來た者を、煩はし玉ふな。」と云た。仲算、「誠に。さうだ。」と云て、劍で、山の鼻をきると、醒井の清水が湧出た、と載す。

この仲算の仕方は、弘法より、遙かに殊勝で、怨みに報ゆるに、直きを以てした者だ。「やぶちゃん注」以上は、「撰集抄」の巻七の「第五 仲算佐目賀江ノ水掘出ス事」である。所持する岩波文庫版(西尾光一校注一九七〇年刊)を参考に電子化する。

*

第五 仲算佐目賀江ノ水掘出ス事

延喜「やぶちゃん注」九〇一年から九二三年まで。」の御代の末つかたの比ひ、此仲算大徳、同朋、あまたいぎなひて、あづまのかたへ、修行したまひけるに、天あめが下、日

照りて、すべて、絶えせぬ清水なども、皆、干かわきて、飢ゑつかるゝ物、おほく侍り。

しかあれど、佛・菩薩のおたすけにや侍りけん、近江の國、ある山中に、清水のありけるを、はるかの遠き所よりも、あつまり、汲みける也。

ある女の、水をいたゞきて行けるを、仲算大徳、

「つかれ侍り。ちと、喉、うるゑん。」

と、あるに、此女、云やう、

「貴げなる聖の、水をも、わかして、飲み給へかし。われわれが、はるばるの所より、からくして、汲たる物を、乞ひ給ふべき理、なし。」

と、こたへければ、此大徳、

「さらなり。さらば、水をわかつて、飲みなん。」

とて、山の岸「やぶちゃん注…崖。」にはしりよりて、劍をぬいて、山のはなを切り給ひたりければ、まことにつめたく、清き水の、瀧のごとくにて、ながれ出侍りけり。「さめがへの清水」といふは、是なり。

さて、その里の物ども、目も、めづらかに覺えて、あさみ、のゝしるわざ、事も、なゝめならず。

そののち後は、いかなる日照りにも、絶えずぞ侍りける。

さて、その、四、五日へて、淨藏貴所の過ぎられるが、此清水の事をきゝ給ひて、「われも、さらば、結縁せん。」

とて、又、そば「やぶちゃん注…「岨」。崖。」をきられたりければ、さきのよりは、すくなけれども、清水、わき、ながれけり。「小さめがへ」と云（いふ）は、是にぞ侍る。

あはれ、目出いまそかりける人々かな。たゞし、此仲算大徳は、箕尾にて、千手觀音とあらはれて、瀧に、つたひて、登り給ひし後は、又も、見え給はずと、傳には、しるせり。されば、久遠正覺の如來にていまそかりければ、かやうの不思議も現じ給ふわざならずしも、驚き騒ぐべきふしも侍らず。淨藏、善宰相のまさしき八男ぞかし。それに八坂の塔のゆがめを、なほし、父の宰相の此世の縁、つきて、さり給ひしに、一條の橋のもとに行きあひて、しばらく、觀法して、蘇生し奉られけるこそ、つたへ聞くもありがたく侍れ。さて、その一條の橋をば、「戻り橋」といへる、宰相のよみがへる故に、名づけて侍り。

「やぶちゃん注…以下、底本では全体が二字下げ。」

「源氏」の「宇治」の巻に、『行くは歸るの橋なり』と申たるは、是なりとぞ、行信は申されしか。「宇治の橋」と云は、あやまれる事にや侍らむ。

*

この仲算（生没年不詳）は、[当該ウィキ](#)によれば、平安中期の法相宗の僧。奈良興福寺の空晴に師事。応和三（九六三）年の法華經講論では、南都仏教側の代表として、北嶺天台宗の代表良源を屈服させた。安和二（九六九）年、熊野の那智に赴き、その年に没したとも、貞元元（九七六）年に没したとも伝えられている、とあった。」

弘法大師は、又、食用の芋を全く食べないクハズ芋に變じ、又、屋島の、或る梨の實を食へなくした（「葛飾記」下。「日本傳説集」二二二頁。「日本風俗志」三卷三五〇頁。『日本傳説叢書』「信濃之卷」、三二七頁。「本草圖譜」四七卷一六一―一七葉。『日本傳説叢書』「讃岐之卷」、二八四頁。寺石正路氏「南國遺事」一四二頁）。較や是等に近きは、鶏頭豆の話だ。其圖は「本草圖譜」四〇卷八―九葉にあり。その傳説は山中笑氏が『郷土研究』第一卷第五號に出された。大要は、往時、駿州吉原町附近石坂てふ小村に、老夫婦あり。夫は、鶏冠花けいとうと豆を、年々、畑に蒔て樂み、妻は、「鶏冠花杯、何の用に立つ。」と、毎々罵る。或年、夫、豆をまくを忘れ、ケイトウ斗り、まいた。秋に及び、畑一面に、ケイトウが眞赤に咲いた。老婆、之を見て、火の如く怒り、「鶏頭が、味噌になるか。」と罵る。其時、戸に佇ずんだ老僧、「そんなに怒るな。鶏頭が豆を生ずることも、ある。」と云ひ、老婆は、「役に立ぬ草から、豆が取れるか。」と罵る。法師、「いや。畑へ往て見られよ。」と言たきり、行方しれず。婆、夫を罵り、熱く成り、風に當りに、畑へ行けば、鶏頭畑は、花をおさめて「やぶちゃん注…ママ。」一面の豆となり居り、夫は、例年の通り、入用だけを自家え「やぶちゃん注…ママ。」取て、餘分を上納し、官より、褒美さる。件の法師は弘法で、老夫の正直を賞し、老婆の邪見を誡めんと、此奇特を見せた、と。

一八二一年パリ板、コラン・ド・ブランシーの「遺寶靈像評彙」一卷二七〇頁に云く、聖地のカールメル山に深穴あり、「エリア窟」と稱ふ。エサペルの追究を避て、この豫言者が隠れた處といふ。そこから二里に、エリア園てふ所あり。エリア、爰を過るに、疲れ、又、渴した。そこに、園人、有て、甜瓜、多くある畑に息ふをみて、「一つ、くれ。」と望むと、「お氣の毒だが、是は、石だと知らないか。」と云たので、エリア、「石なら、石にしておかう。」と云た。それと同時に、甜瓜が、少しも形をかえず「やぶちゃん注…ママ。」皆、石に成て了つた。爾來、今日迄も、甜瓜と間違ふ程、似た石を、爰で見出す。と。伊人ピエロッチの「パレスチナ風俗口碑記」（一八六四年劍橋板）七九頁に、この甜瓜形の石は、石灰質で、中、空しく、殻の裏が、多くの（石灰）結晶で被はれた地形石、英國でポテト・ストーン・ストーン（ジャガイモ石）てふ物だ、と云た。

「やぶちゃん注…カールメル山」イスラエル北部のハイファ地区ハイファにある山。南北三十九キロメートルに亘つて広がる丘陵地。[ここ](#)（グーグル・マップ・データ）。

「エリア」「旧約聖書」に登場する預言者。ユダヤ教では、モーセ以後、最大の預言者と見做された。

「エサペル」「旧約聖書」の「列王記」に登場する古代イスラエルの王妃。フェニキア人で、イスラエル（ユダヤ）人にとって異教であるバアル信仰を、イスラエルの宮廷に導入し、ユダヤ教の預言者たちを迫害したことで知られる。

「石灰質で、中、空しく、殻の裏が、多くの（石灰）結晶で被はれた地形石、英國でポテト・ストーン」(potato stones)「ジャガイモ石」とてふ物」ジョー晶洞。[当該ウィキ](#)によれば、

『堆積岩や、火成岩玄武岩内部に形成された空洞の事で、鉱山などでは俗称で《がま》ともいわれる。』『ギリシア語で「大地に似た」を意味する語』に由来する「ジョー

ド(英: Geode)」との呼称が、『国内外で一般的である』。『内部には熱水や地下水のミネラル分によって、自形結晶が形成される』とある。」

豫言者エリアは、神力、殆んど、弘法大師に匹敵したと見え、回教所傳に、次の話がある。云く、イスラエルの諸子の時、上帝に好愛された善信の回教徒エリツス、一名エリアスなる人あり。上帝、正道を踏違へた輩を本復せしむる爲、此人を予言者たらしめんとて、彼に告たは、「起つて、眞道を説教せよ。而して、此等の頑冥な罪人共が、汝の言を信受し得る様に、汝が足で踏む所は、どこでも、綠草と、美花、生じ、決して乾き荒ますまざらしむべく、汝が、枯木の下に坐らば、其が、葉を生じて、再び、緣(ケデール)と。それより、エリアスが諸國を巡つて上帝の語を宣る内、ケデール村に、強勢の村老、あつて、猛威、四隣を壓した。此人、「エリアスの説教に、少しも隨喜する望みなし。だが、エリアスの働きを用ひて、己れを、利せん。」と欲し、エリアスがソロモンの開いた池に近づく處を、捕え、自宅へつれ來らしめた。「汝の足は、神力を、もつと、聞く。子の領地を歩いてくれ。明日、予が案内せう。一旦、予につかまつた者は、上帝でも、取り離すことはできぬ筈。」と悪さげに言放つて、其夜を、狭い土牢中に過さしめ、明旦、エリアスを、重い鐵鎖てつくさで括つて引出し、鎖の一端を自分が執て、件の池の方へ歩かせた。扨、エリアスがあるき出す。一步毎に、草も、木も、穀類も、萎み枯れた。爾來、此地、永く荒廢し、草木、生ぜず。村老、かくと見て、大に怒り、エリアスを、池に沈めうと惟ふ内、エリアス、喉、乾いて、「池に入つて、水、飲まん。」と乞た。村民、之を許し、逃がさぬように鎖を離さず「やぶちゃん注…主語は「村老」。所が、エリアス、池の底に到ると、狭い水道、忽然、開いて、よき通路となり、鐵鎖は、果てしなく伸び行くから、エリアス、思ひの儘に、進み歩く。數歩の後ち、水をのむと、鎖附きの足械が外れ、岩、忽ち、彼の後ろを塞いで、村老と、係累を絶つた。それより、エリアスの形ち、人の眼に見えずに、世界中を歩き廻り、到る處、草木、綠に茂らせ續ける内にも、年に一度は、ミノよりメツカへの巡禮を缺さない。悪性の村老は、エリアスが雲隠れとなるをみて、發狂し、まもなく死んだそうな「やぶちゃん注…ママ。」(上に引たピエロツチの書、七二―七四頁)。

又、聖地の雛チツク・ピース豆畑について、イサベル・バートン著「シリア内部生活」二卷一七八頁に云く、基督、爰で、雛豆をまく男に、「何を、まくか。」と尋ねると、「石を、まく。」と答へた。基督、「汝は、石を收穫すべし。」と云た。扨、此人の收穫となつた時、雛豆は、ならず、其形した石ばかり有た、と。ピエロツチ説に、之を、聖母の所爲とし、此所の石灰石が雛豆塊の如くみえるから、此話を生じた、と解た。ピエロツチ、又、死海に近いピルケット・エル・カーリル(アブラハム池)の緣起を記す。云く、アブラハムは、アラビア語でエル・カーリル(上帝の友)と云れ、ヘブロンに住だ。此池は、其東にあり、住民、そこで鹽を集め賣た。アブラハム、一日、騾を牽て、鹽を求めに來ると、製鹽工夫が、多量の鹽を擴げおき乍ら、「賣るほど、鹽がない。」と言た。すると、アが、詛ふて、「今後、爰に、鹽も、出でず、爰から、ヘブロンへゆく道も、絶よ。」と云た。其れと同時に、鹽、

残らず、石に化し、姿のみは、鹽、其まゝ、又、ヘブロンへの道も、丸で歩かれなく、嶮岨に成た、と。

弘法大師や基督が、氣に食ぬやつ、芋や豆を石にしたは、大分、茶目氣がある。アブラハムが鹽を賣て吳ぬを憤つて、之を化石せしめた上に、萬人の通路を廢絶せしめたに至つては、過酷も、甚だし。但し、アフリカにも同様の話あり。デンネットの「黒人の心裏」、一九〇六年板、一五二頁に、カコンゴで、子を負た老女が、畑を栽る女に、水を乞うと、「ここは、水、遠く、自分飲むだけ有て、人にやる程、ない。」と答へた。老女、又、行つて、椰樹の汁をとる男子に乞ふと、快く、椰子酒を飲せた。老女は、其青年を褒賞し、水を吝んだ女の畑を、湖に化した、と載す。

「酉陽雜俎」二に、衛國縣の西南に瓜穴あり、冬・夏、常に水を出し、之を望めば、ねりぎぬ練の如し。時に、瓜葉、あつて出る。相傳ふ、苻秦の時、李班なる者あり、頗る、道術を好む。其穴に入て、三百歩程、行くと、宮殿あり、牀榻「やぶちゃん注…「しやうたふ」現代仮名遣「しようとう」。寢台。」上に、經書あり、二人、對坐して、鬚髮白きを見た。班、進んで、牀下に拜すると、其一人が、「早く還れ。」と、いふ。穴口迄出ると、瓜、數個あり。取んと欲すれば、乃ち、石と成た。家へ還ると、四十年立て居たといふ、とあり。「大慈恩寺三藏法師傳」四には、瞻波國の南の大山林中に、牛を放ち飼た男が、牛の行き處を尋ねて、岩穴に入り、金色の香果を取り還るを、鬼に取戻され、再び、往つて、口に入て出る處を、鬼に、喉をつまゝれ、呑んでしまふと、其人の身が、大きく成り、首は、穴から出たが、體は出ず、漸々、化石し終つた話を出す。

「やぶちゃん注…「衛國縣」後漢の時に置かれた衛県。後の北魏の時、衛県に改められた。故城は山東省の旧觀城県の西にあつた。現在は聊城りやうしやう市の一画。[この附近](#)（グーグル・マップ・データ）。所持する平凡社『東洋文庫』の今村与志雄訳注を参考にした。

「苻秦」苻秦の支配した前秦王朝（三五〇年～三九四年）を指す。同前。

「瞻波國」「せんばこく」「チャンパ・バコク」。チャンパーナガラ Champānagara。紀元前六〇〇年頃、北インドに栄えた十六大国の一つであるアンガ国の首都チャンパーChampāの遺址とされ、マガダ国による占領後の釈迦の時代にも、インドの六大都市の一つとして栄えた。七世紀前半に玄奘がここを訪れ、せんぱこく瞻波国として「大唐西域記」に記している。現在の、[この附近](#)に当たるといふのである（主文は平凡社「世界大百科事典」の「パーガルプル」の記載に拠った。）。

話がこう長くなると、讀者のみかは、熊楠自身も何だか跡先が分からなくなる。因て、再讀、校字を兼ねて、始終を見通し、結論と出かけよう。

西洋で鷺石といふは、褐鐵鑛、又、それより成た岩石が、多少、圓くて、中空、そして空處に、土や砂や小石を藏した者で、地方により、其產地近く、鷺が住み、其の鷺の巢から、此石を見出し、氣を付て見れば、多少、母胎に子を藏するの状あるより、鷺が同感作用を心得、自分の卵を安全に孵す爲に、此石を、其巢に納めたと判じ、鷺が卵を孵すも、

母が子を産むも、同じ事ゆえ「やぶちゃん注…ママ。」、鷲にきく物は、人にもきく筈と、試し見ると、三度に一度は、よい加減に、効あり。由て、之を、安産催生の靈品とした。それから敷衍して、種々の効驗あると見立て信じた次第を、第一篇に専ら述べた。

鷲石は、鷲が巢内に持ち込んで、其の孵化を助くるといふ信念は、東洋に、ない。しかし、鷲石、その物は、和漢共に、有り。「太一禹餘糧」杯呼び、其形が、母胎に子を藏するに似るを見て、西洋人と齊しく、矢張、催生安産の靈物とした。又、西洋とちがひ、此石の中にある砂土が、穀物の粉に髣髴たるより、之を、古聖賢が食ひ残した糧食と信じ、此追ひ追ひ、之を食へば、長生して、仙人になり得、と信じた。それから、其成分の鐵等が、相當に働らくより、之を藥用して、甘寒無毒、牡丹爲_二之使_一、伏_二五金_一制_二三黃_一、主治_二效逆寒熱煩滿_一、下_二赤白_一、血閉癥瘕大熱、鍊餌_二服之_一不_レ饑、輕_レ身延_レ年、療_二小腹痛結煩疼_一、主_二崩中_一、治_二邪氣及骨節疼_一、四肢不仁、痔瘻等疾_一、久服耐_二寒暑_一、催_レ生固_二大腸_一。「禹餘糧は、甘、寒。無毒。牡丹、之れが使_二と爲_レり、五金を伏し、三黃を制す。主治は效逆・寒熱・煩滿なり。赤白・血閉・癥瘕・大熱を下し、鍊りて、之れを餌服すれば、饑えず、身を軽くし、年を延ばす。小腹痛・結煩疼を療す。崩中を主り、邪氣及び骨節疼、四肢の不仁、痔瘻等の疾を治す。久しく服すれば、寒暑に耐へ、生を催し、大腸を固くす。」又、太一餘糧、甘平無毒、杜仲爲_二之使_一、畏_二貝母菖蒲鐵落_一、主治_二效逆上氣癥瘕血閉漏下_一、除_二邪氣_一、肢節不利、久服耐_二寒暑_一、不_レ饑輕_レ身、飛行千里、神仙、治_二大飽絶力身重_一、益_レ脾安_二臟氣_一、定_二六腑_一鎮_二五臟_一。「太一餘糧は、甘、平。無毒。杜仲、之が使と爲る。貝母・菖蒲・鐵落を畏る。主治は效逆・上氣・癥瘕・血閉・漏下なり。邪氣・肢節の不利を除く。久しく服すれば、寒暑に耐へ、饑へず、身を軽くし、千里を飛行して、神仙となれり。大飽・絶力・身重を治す。脾を益、臟氣を安んず。六腑を定め、五臟を鎮む。」と「本草綱目」に見ゆ。是等、半分には聞いても、多少、據るある法螺で、諸方に出る、禹餘糧・太一餘糧を、至細に分析でもしたら、實效ある藥物學上の發見もなる事だろうが「やぶちゃん注…ママ。」、自分、其方は、あんまりときてゐるから、立ち入らぬが、無手勝流のト傳だ。

「やぶちゃん注…『本草綱目』は『漢籍リポジトリ』の同書の『卷十』の『金石之四』の『禹餘糧』(1032-10a1)と、続く『太一餘糧』(1032-12a1)の影印本画像と校合した。熊楠は、続けてソリッドに引用しているのではなく、パッチワークであるので注意されたい。なお、『糧』は『糧』に同じで、ここでは混乱を避けるため、熊楠の表記に従った。なお、症状名は、私も熊楠同様、「其方は、あんまりときてゐるから、立ち入らぬ」こととする。悪しからず。」

扱、第二篇には、太一禹餘糧の外にも、古人の食ひ残した物が、石に化して、今にありてふ現品と傳説は、諸邦に存し、甚しきは、飲み残した「しろ水」「やぶちゃん注…穀類の研ぎ水。」や、酒・醬油・酢、又、よそから運んだ水迄も、その儘、其所に續出するてふのも、諸處にあり。又、古人が食ひ残した物が、化石せず、復活して、今に相續蕃殖し

おる「やぶちゃん注…ママ。」ちふ、現品と傳説も、多くある由を述べ、次にはたゞ食ひ飽たり、好かなかつたりで、残した物が、石に成た外に、或る食物や、其持主、又、作り手を、嫌ひ、悪んで、之を、石にしたり、廢物にしたりしたのが、今に存するてふ信念も、諸邦に少くない次第を例示し、己れの望む物を、くれなんだ奴の生産地を、全く、不生産にする事も出来るてふ信念に説及び、終りに、自分の愛惜する物を、他人が取ると、忽ち、石となし、又、其人を石となした昔話を、引出たのである。

附 録

○孕石 『性之研究』第一卷第六號二二三頁に、「獨逸には安産の爲に、『孕石』と云てガラガラ鳴る固形物を包んだ一種の石を眞鍮に包み、産婦の左腰部に垂しおく習慣がある」と誰かゝ書いた。「孕石」とは獨逸語で何とか知ず。或は別にそんな意味の獨逸語はなきも、本邦に「孕石」てふ物あるに付て、獨逸で所謂アドレル・スタイン（鷲石）、一名クラツペル・スタイン（ガラガラ石）を、かく「孕石」と譯したのかとも推察する。藤澤君の『日本傳説叢書』「伊豆之卷」に、賀茂郡田子村平野山麓に「孕石」あり、高さ二丈、周り七、八尺ばかり、出産を祈ると、効驗あり、と信ぜられたが、今は、畠に落ち轉がりおる「やぶちゃん注…ママ。」由を記す。柳田君が『太陽』第一七卷第一號「生石傳説」に載せた通り、諸國に、小石、團結して大岩と成たのが、風雨に削られて、時々、多少の小石を放ち落すを、「石が、子をうむ。」と誤り、産婦安産のまじなひに用いて、「子持石」と名く。既に「子持石」と云ば、「孕み石」と唱える「やぶちゃん注…ママ。」例も多々有た事と記憶はすれど、差當り、確かに「孕み石」と名けたは、伊豆の一例しか知ぬ。其例有ば、識者の報道を冀ふ。「雲根志」などみればよいのだが、座右にないから仕方がない。「類聚名物考」附録三に「三河記」を引き、家康、幼時、駿河に人質たりし時、侮辱された仕返しに、後年、高天神落城の節、孕石主水に切腹させた、とある。此孕石は、多分、どこかの地名で、そこに「孕石」と呼れた石が有たて有う。

「やぶちゃん注…「孕石」「はらみいし」。

『日本傳説叢書』「伊豆之卷」に、賀茂郡田子村平野山麓に「孕石」あり、高さ二丈、周り七、八尺ばかり、出産を祈ると、効驗あり、と信ぜられたが、今は、畠に落ち轉がりおる由を記す」[国立国会図書館デジタルコレクションのこちらの原本（大正七（一九一八）年刊）](#)のここで当該部を視認出来る。ブログ版の読みはそれに従った。ここでは転がっている場所を「[巻田](#)」と記している。「賀茂郡田子村」は現在の[静岡県賀茂郡西伊豆町田子](#)（[グーグル・マップ・データ](#)）。「平野山」は「[ひなたGPS](#)」の[戦前の地図](#)を見ても、旧同地域には無名のピークが複数あり、同定不能で、「巻田」の地名も見当たらない。

「柳田君が『太陽』第一七卷第一號「生石傳説」に載せた」[国立国会図書館デジタルコレクション](#)の『定本柳田国男集』第五卷（一九六二年筑摩書房刊）で視認出来る。また、誰でも見られる「[私設万葉文庫](#)」の同卷（一九六八年刊版）の「493」（ページ・ナンバー）で電子化されたものもある（新字と旧字の混淆版）ので、参照されたい。これは電子化する意志は私にはない。

『雲根志』などみればよいのだが、座右にないから仕方がない』熊楠先生！ 私が所持する現代思潮社の『復刻 日本古典全集』版の『雲根志』の「卷之五」で、「孕石 廿六」を見つけました！ 以下に示します。それらしい絵も添えられてあるので、それも載せませう（底本には『禁無断複製』とあるが、これは本書全体の複製を指す。平面的に撮影されたパブリック・ドメインの画像には著作権は発生しないというのが、文化庁の公式見解であるから、トリミング補正したこれは、違法ではない）。

*

「やぶちゃん注：絵は上手く撮り込めないのと、小さくなることから、[ブログで掲げた大型の画像のリンク](#)とする。」

孕石廿六

大小鞠のごとく色黒く半破なかばやぶれ「やぶちゃん注：「やぶれ」はママ。」たり石中に白色しろいろにて大さ掌を合せしばかりのかたき石をはらめり外皮黒き物は數枚かさなれるかたち也鮮答さくたうの類にて生得せうとく「やぶちゃん注：「せうとく」はママ。」の石也勢なご刃長野まつばらの松原にて拾ひ得たり

*

ここに出る「鮮答さくたう」とは、獣類の体内に出来る異物（多くは塊状の結石）で、種々の様態がある。古くは解毒剤として用いた。詳しくは、[「南方熊楠 本邦に於ける動物崇拜（6・牛）」](#)の私の「鮮答」の注を参照されたい。

「類聚名物考」江戸時代の類書（百科事典）。日本文物の類書中でも形式・内容ともに充実した最初のものでされる大著。成立年は不詳。編者は江戸中期の幕臣で儒学者で、賀茂真淵門下の国学者でもあった山岡浚明（まつあけ 享保一一（一七二六）年～安永九（一七八〇）年）。「日本大百科全書」の彌吉光長氏（懐かしい名だ。図書館概論で講義を受けた。受けていた女子が体調不良で卒倒し、皆で保健室から担架を持って来て、運んで戻ってみると、平然と講義を続けていて、流石にムツとして「先生！」と叫ぶと、「何かありましたか？」と平然と答え、そのままさらに授業を続けた。私はそれ以降、当該の講義をポイコットし、試験だけ受けたが、「優」を呉れたので文句はない）の解説によれば、『彼は博学で有名であったが、若いときから国書を広く読み、その抄をつくって整理していた。しかし、先輩の老人に、抄出しても急場に役だたぬから暗記せよと諭され、その教えに従って破り捨てたものの、記憶には限界と誤りがあると覚』『って、この編集にかかったという。そのため、基本的図書は破棄されたままに脱している。現存の』三百四十二『巻を精査すると、天文、時令、神祇（じんぎ）、地理など』三十二『類と抜き書きの部に分かれていた。各項目は総説と考証、文献からなり、その考証の行き届いて合理的なことは類をみない』とある。[国立国会図書館デジタルコレクションのこちらで活字本で当該部が視認出来る](#)。右ページ上段の「〇切腹」がそれ。

「孕石主水」[孕石元泰](#)（？～天正九（一五八一）年）は、[当該ウィキ](#)によれば、『今川氏、

武田氏の家臣。諱の「元」は今川義元の偏諱と思われる。『今川氏の家臣』『孕石光尚の子として誕生。孕石氏は遠江国原田荘（静岡県掛川市）を本拠とする原氏の庶流の一族で、孕石村を本拠とした。元泰の祖父にあたる行重のころより今川家臣となる。元泰の史料上の初見は』天文二一（一五五二）年九月七日に見え、『今川義元より父』『光尚の遺領相続に関して指示を受けている』。永禄一一（一五六八）年の『武田信玄の駿河侵攻によって今川氏から離反して武田氏の家臣となり、翌年』四月に『駿河国足洗郷（現・静岡市）や遠江国各所の知行地を安堵された。元泰は朝比奈信置や岡部元信と並ぶ駿河先方衆の』一『人であり、武田信玄の駿河平定戦に参陣して武功を挙げ、特に同年』十二『月の蒲原城』（かんばらじょう）『攻略戦では信玄より感状を賜った』。『武田氏の駿河平定後は江尻城（現・山県昌景』（やまがたまさかげ）『の相備』（あいぞなえ）』に編成され、駿河国藤枝郷（現・藤枝市）に知行地を得て領内の市立てや』、『堤の再興に尽力した』。天正三（一五七五）年四月の『武田勝頼の三河侵攻に際しては』、『江尻城の在番を務め、三河戦線にいる山県昌景より』、『江尻城の普請・警固について指示を受けている』。同五年七月には『勝頼より』、『改めて駿河・遠江各所の知行地である』四百八十『貫文を安堵された』。天正七（一五七九）年より、『遠江高天神城』（[ここ](#)…グーグル・マップ・データ）『の在番を務める。高天神城は翌年から徳川軍の攻囲を受け、同』九年三月二十二日に『高天神城が徳川軍に攻略され』（第二次高天神城の戦い）、『元泰は捕らえられ、翌』二十三『日に切腹させられた』。『なお、降伏者で切腹を申しつけられたのは孕石一人であった。切腹の際、極楽があると信じられた西方向ではなく、南に頭を向けて腹を切ろうとし、それを指摘されても、敢えて方角を直さなかったと言われている』。『子の孕石元成は、土佐山内氏に仕えた』。「家忠日記」・「三河物語」に『拠れば、今川家臣時代は人質時代の徳川家康と屋敷が隣り合わせであった。鷹狩りが好きな家康が放った鷹が獲物や糞を隣家の孕石の屋敷に落としており、度々』、『苦情を申し立てていた。そのことに腹を立てていた家康により』、『十数年の』後、『彼は切腹させられた』とある。鷹の糞、恐るべし。

支那にも、そんな石、有た證據は、「淵鑑類函」二六に、郡國志曰、乞子石在馬湖南岸一、東石腹中出二小石一、西石腹中懷三小石一故熨人乞子於此一有レ驗〔「郡國志」に曰はく、乞子石は馬湖の南岸に在り。東の石、腹中より、一小石を出だし、西の石、腹中に一小石を懷く。故に熨人子を此れに乞ひて驗有り。〕と出す。フギジ島の都パウ近處に、一石、立てり。高位の婦人、子を産む時、此石、亦、小石を産む（バルフォール「印度事集」三卷七四二頁）。テオフラストス、ムキアヌス、デモクリツス、サヴヲナロラ、カールダン杯が、石、時として、子を生む、と説たは、主として、こんな石から出た話で有う（ポストツク及リレイ英譯、プリニウス「博物志」第六卷三五八頁）。去ば、『性之研究』にアドレル・スタインを「孕石」としたは、適當ならず。「孕石」は「鷺石」と別で、佩た女に安産せしむるでなく、拜む女に子を授くる石で、一汎に、「鷺石」よりは、ずつと大い者だ。

「やぶちゃん注」：「淵鑑類函」は「漢籍リポジトリ」の同巻の「石二」の「黄石」の[031-476]の影印本と校合した。一箇所、脱落があり、それを補ったが、もう一箇所の誤りは、深刻な誤りで、「棘人」を熊楠は『楚人』（そひと）と誤っている。「棘」の字を見誤ったか、勝手に「楚」の異体字と思ったものだろう。「棘人」は「[Wiktionary](#)」の「[棘](#)」（呉音「ボク」・漢音「ホク」）に、『棘（とげ）のある植物の多い地域に住んでいた古代の人々。現在の中国西南地区（四川省・貴州省・雲南省）の少数民族。棘人懸棺などの遺跡をのこす』とあるのがそれで、「楚」とは全く違う。しかも民族名であって国名ではないから、漢文の通例訓によって、「ほくひと」ではなく、「ほくじん」と訓じた。なお、「選集」の訓読された文では、二箇所とも正しくなっている。

「フキジー島の都バウ」現在のフイジー共和国には「バウ島」があるが、ここは小さな島であるから、「都」はおかしい。現行の同国の首都は「スバ」（Suva）である。引用元の「バルフォールの印度事彙」はスコットランドの外科医で東洋学者エドワード・グリーン・バルフォア（Edward Green Balfour 一八一三年～一八八九年）インドに於ける先駆的な環境保護論者で、マドラスとバンガロールに博物館を設立し、マドラスには動物園も創設し、インドの森林保護及び公衆衛生に寄与した）が書いたインドに関する Cyclopaedia（百科全書）の幾つかの版は一八五七年以降に出版されている。「[Internet archive](#)」の [The Cyclopaedia of India \(一八八五年刊第三卷\)の原本の「742」ページのSTONE-WOKSHIP](#)（「石崇拜」）の項のこの終りから六行前に、確かに **Baw** と確認出来る。原書がその綴りを誤ったか、呼称が違ったものか、よく判らない。

『プリニウス「博物志」第六卷』プリニウスの「博物誌」の当該部第六巻を、所持する雄山閣の全三巻の全訳版（中野定雄他訳・第三版・平成元（一九八九）年刊）で、三度、通読したが、この記載はない。「選集」でもこの第六巻とするのだが、これは調べたところ、第三十六巻の「石の性質」の中にあることが判ったので、「第六巻」は「第三十六巻」の誤りであることが発覚した。その訳本の『骨石、シュロ石、タエナルス石』の項に、『二九』さらにテオフラストスとムキアヌスは、他の石を産み出す石』（この編者注があり、『驚石のことを言っている』とあり、この同巻の後の「三九」に「驚石くアエティナス」の項も存在する）『がある」と意見を発表する。テオフラストスはまた、骨が地中から生み出されたり、骨に似た石が見つかる」と述べている』とあるから、間違いない（「サヴヲナロラ、カールダン」の人名は探し得なかった。見つかったら、追記する。）」

○驚石に関する一説 英語で書いた版本に n.d. というのがある。no date（日附けなし）の略字で、表題紙にも序文にも出版の年を記しおらぬ。是れはいつも新刊書とみせて客を釣るために卑劣な行ひだ。チャーレス・デ・カイの「鳥神論」がその一例で、ニューヨーク「やぶちゃん注」：「ニューヨーク」のバインズ會社出版とだけ示して、其年記なし。たゞ、表題紙裏に、細字で、一八九八年著者板權認可と出しあり、先は其頃の著作か。根つから、素性のよくない本だが、驚石のことを、一寸、論じあるから、こんな物さえ「やぶちゃん

注…ママ。」買ふ人有ばこそ賣る人もあると、歐米崇拜家輩に、その議論の詰らなさ程度を示さう。その略に云く、フィンランドの古傳に、イルマリネンが鋼・鐵・焰の三物で鷲を作る。ポーヨラの醜婆、火の鷲をして、レムミンカイネンを呑しめんとした。エストニアの舊説に、島母が、海底よりかき上げた鷲卵を、晝は、日の熱、夜は、吾が身で、温め、孵した。印度の教典には、金翅鳥王は日神の馭者アルナと、一卵より、双生した等、鷲と、日や火を連ねた譚が、諸邦にある。扱、鷲が老て、動作、きかなく成たを、みた人、なく、其死體を見た者、なし。數百年間、鳥類の王とし、統制した後ち、高く九天を凌いで、日輪の大光明中に入て、復た、見えず。それより、若返つて、海中に飛下る。火に淨められ、二度めの生命を獲る事、ヘラクレスに異ならぬ。されば、古埃及人が日の表章とし、火の力で復活すと信じたフェニクスが鷲の事たるや、論を俟たず。

「やぶちゃん注…以下、底本では全体が一字下げ。附記の際に熊楠が行う仕儀。」

フェニクスは、支那の「鳳凰」に當て譯したり、マルコ・ポロの「記行」や「千一夜譚」に見えたマダガスカル「ロク」や、ペルシア書に出た巨鳥「シムール」や、ヒンズー教・佛教の經典にある「金翅鳥王」と混同された。ヘロドトスの「史書」第二卷七三章に初めてフェニクスを記し、云く、『予は、此神鳥を繪で斗りみた。實は、埃及でも希有の物で、ヘリオポリス（日都）人の説に、その老鳥が死んだ時、五百年に一度、此都へ來るといふ。繪でみた所ろ、羽毛、一部、赤、一部、金色で、形ちと、大きさは、殆んど鷲の如し。日都人の、この鳥の話はうそらしい。云く、此鳥の親、死したら、其戸を、全く、没薬でぬりこめて、アラビアより日都へ將來し、そこに埋める。之を將來するに、先づ、自分が運び得る丈の大きさに、没薬を圓め、中を空にして、親の屍を納め、穴口を新しい没薬で埋める、と。かうしない「やぶちゃん注…ママ。「選集」も同じだが、意味が通らない。「かうすると、」の誤記ではあるまいか？」内と正しく同重量となる。それを埃及に持來つて、日堂に納む。』と。プリニウスの「博物志」第十卷二章には、エチオピアと印度に、他に優れて、羽色多様で、文筆の記述し能はざる鳥を産す。其第一は、フェニクス、是れ、アラビアの名鳥だ。全世界に唯一羽、存し、屢ば見える物でない。大き、鷲の如く、頸のぐるりの羽毛、金色で、輝き、其他の諸部は、紫で、尾は碧色、其れに、桃色を雜えた長い羽あり。喉に垂囊、頭に、冠毛あり。精しく此鳥を初めて記載した羅馬人は議官マニリウス、此人は、教師なしに博覽の高名を博した。其説に、此鳥、食事するを、見た者なく、アラビア人は「日の神鳥」と崇む。壽命は五百四十歳、老れば、カツシアと、香木の枝で、巢を作り、諸香を中に満て、之に臥して、死す。すると、其骨と、髓より、一疋の小虫、生じ、漸く化して、小鳥となり、先づ、死鳥の葬禮を營なみ、彼の巢を、そつくり、パンカイアに近い日都に運び、日神の壇に、之を、おく、と。「フィシヨログス」（動物譬諭譚）は、出處雜駁、或は、不明の怪しい物だが、中世、尤も廣く歐州で行れた。随つて、其第七譬諭なるフェニクス譚は一番多く世間に傳播されて、今に、俗耳を鼓吹しおる「やぶちゃん注…ママ。」。云く、フェニクスは印度の鳥で、空氣を吸て、五百年、生き、

其後ち、翅に香類を載て、日都に飛行き、日神廟に入て、壇上で、自ら、焚くと、翌日、其灰より、其雛、自ら生じあり。三日目に、翅、全く成て、祠官を禮し、飛び去る云々と。「やぶちゃん注：一字下げは、ここで終わる。」

「ヘリオポリス」(ギリシア語ラテン文字転写：Heliopolis／英語等：Heliopolis)は、当該ウィキによれば(地図あり)、『現在のカイロ近郊に存在した古代エジプトの都市。よく知られている都市の名はギリシヤ人によって名づけられたもので、ギリシヤ語で「ヘリオスの町＝太陽の町」という意味である。古代名では「Iunu イウヌ」あるいは「Onオン」と呼ばれていた』。『ヘリオポリスはヘルモポリス』(リンクは当該ウィキ)と並んで、古代エジプトの創世神話の中心地として有名である』とある。

「没薬」ムクロジ目カンラン科カンラン科 Bursaceae のコンミフォラ(ミルラノキ)属 *Commiphora* の樹木から分泌される赤褐色の植物性ゴム樹脂を指す。ウィキの「没薬」によれば、『スーダン、ソマリア、南アフリカ、紅海沿岸の乾燥した高地に自生』し、『起源についてはアフリカであることは確実であるとされる』。『古くから香として焚いて使用されていた記録が残され』、『また殺菌作用を持つことが知られており、鎮静薬、鎮痛薬としても使用されていた。古代エジプトにおいて日没の際に焚かれていた香であるキフイの調合には没薬が使用されていたと考えられている。またミイラ作りに遺体の防腐処理のために使用されていた。ミイラの語源はミルラから来しているという説がある』とある。

『プリニウスの「博物志」第十卷二章には、エチオピアと印度に、他に優れて、羽色多様で、文筆の記述し能はざる鳥を産す。其第一は、フェニクス、是れ、アラビアの名鳥だ。全世界に唯一羽、存し、屢ば見える物でない』当該部は、所持する雄山閣の全三巻の全訳版(中野定雄他訳・第三版・平成元(一九八九)年刊)で確認した。ただ、言っておくと、このフェニックス(不死鳥)の話の冒頭では、プリニウス自身が、「これはたぶん架空な話と思うが」と初めにしつかり附言している。

「喉に垂囊」この熊楠の謂いは、あたかも砂囊を想起させるが、前記の訳では、『喉にはところどころ毛の房があり』で、印象が異なる。』

鷺は、火に因て、自再生するのみならず、又、實に、火に試されて生存を始む。蓋し、鷺、子を生み、其子、日を視て眺。「やぶちゃん注：「まじろく」「瞬ぐ」の古形。「またたく」の意。』げば、鷺として生活するに堪ぬ者として殺し了る、と云ふ。鷺の巢より見出さるゝ鷺石は、二百年前迄、種々、奇効ありとて賣ばれた。酸化鐵にさび付れた粘土質の小石、又、圓い石で、其腹空しき内に、石、又は、結晶が離れあり、明らかに火の作用に基づくを示す。惟ふに、古人は、鷺が此石を、日、若くは、火山より持て來た、と考えた「やぶちゃん注：ママ。』のだ。何にしろ、鷺石は、眼病を治し、難産を救ひ、又、奇な事には、盜賊を露はす功あり、とされた。多分、日より出たもの故、盜人がいかに匿すも、日の照覽をゴマカシ得ぬてふ譯だろう「やぶちゃん注：ママ。』。鷺は、其卵を速く孵すため、此石を巢に納ると云ふのも、亦、此石は日の熱を享け持ちおる「やぶちゃん注：マ

マ。」としたからだ、と。

デ・カイ氏は、種々の話を並べ立て、其出所を明示せず。是亦、庸人「やぶちゃん注…一般人。」を驚かし、學者を馬鹿にしたやり方で、見やう見まねに、近來、本邦にも、こんな著書や立論が大流行だ。「鷲が老て、動作、きかなく成たを、みた人、なく、其死骸を見た人、なし。」とは、プリニウスの「博物志」第十卷四章に「鷲は、老と、病と、餓で、死なず。たゞ久しく生きると、上嘴が長く伸び、且つ、甚だしく曲つて、口を開く能はずして、死ぬる。」(熊楠謂ふ、そんなら、矢張、老と餓に殺されたのだ)とあるを、小刀細工したので、「數百年間、鳥類の王として云々」と冒頭して、鷲が日の大光明中に入れて見えなくなり、其より、若返つて、海中に飛び下る云々、と云たは、例の「フィシヨログス」の第六譬喩に、鷲、老ゆれば、日光にあたり、扱、噴泉に浴して、若返る、と有るを、デ・カイ自身が、其書の八章の初めに述べた通り、米國東海岸で、米國産の鷲が、海から飛できて、山を踏え去た景觀から思ひ付て、『日光に當り』を、日輪に直入する如く、吹き増し、『噴泉』を『海中』と改作したので、自論を翼けん「やぶちゃん注…「たすけん」と読む。」とて、虚構・假説を、何か確かな古書に載りある様に書立た、誠に、恥なきの至りである。

扱、「フェニクスが鷲の事たるや、論を俟ず。」とは、是れ亦、不實で、人を欺むかんとする者だ。「大英百科全書」十一板二十一卷、「フェニクス」の條に、『ホラポロン(五世紀の初頃)とタキツス(紀元五五年頃—一七一年頃)は、明かに、フェニクスを日の表章と云た。今、吾人は、埃及の諸古文より、ベヌなる水鳥が日都鎮座の神の表章の一で、又、旭日の表章たり。隨て、日が、毎旦、復活するを標示し、日神ラの魂、又、新たな日の心臓と稱せられた、と知る。去ば、旭日が東方に出るを、ベヌが東方より諸香を持來るとしたので、埃及語で「ベヌ」、希臘語の「フェニクス」、何れも鳥の名で、或る椰樹の名を兼たのを見ると、どうも、「ベヌ」の「フェニクス」たるを疑ふ可らず。扱、プリニウスが記した、紫がちの羽色なフェニクスに最も恰當「やぶちゃん注…「かふたう」と読む。過不足のないこと。ぴったりしていること。』する埃及の水鳥は、アルデア・プルプレア(紫鷲)だ。ヘロドトスが、フェニクスの形ちも、大きさも、殆んど鷲のごとくと云たは、全く記憶の失だらう「やぶちゃん注…ママ。』。」と論じある。「紫鷲」は、中南歐州より、南阿、又、印度より、支那、呂宋に産す(「劍橋動物學」第九卷九三頁。バルフォール「印度事集」、「アルデア」の條)。モレンドルフ説に、支那名「天果鳥」、天津で「花窪子」といふ由。和名「ムラサキサギ」とて、石垣島に來るは、同屬別種らしい(『皇立亞細亞協會北支那支部雜誌』第二輯第十一卷百頁。故小川實氏「日本鳥類目錄」三四四頁)。一九〇四年板、バツヂの「埃及神譜」第二卷三七一頁には、『ベヌは、自ら生れ、日都の神木のペルセア樹の頂に燃る火より、出で、生來の「日の鳥」で、「旭」の表章で、又、死んだ日の神オシリスより生ずるから、其、神鳥たり。毎旦、新生する旭を表わすのみならず、夙に、「人間再活」の象徴たり。昨日の没日より、今日の旭日が生ずる如く、物質的の尸より、精神的の人身が、生ずるからだ。此鳥は、オシリスの心臓より生じ、最も

神聖な鳥で、墓内の一室の、側に生た木に、宿った體に、畫かる。」と有て、何の種と明言せぬが、鷺の一種と、しある。一八九四年板、マスペロの「開化の曉」一三六頁には、ヘロドトスが、形と大きが鷺の如し、と明記せるより、フェニクスは、決して、鷺類でなく、金色の雀鷓つみで、本と、若日神ホルスの現身だ、と云た。然るに、バッヂは、所謂、金色の雀鷓、乃ち、ペンヌに外ならぬを證した（『埃及神譜』第二卷三七三頁）。だから、フェニクスは、雀鷓だつたて「やぶちゃん注」：「だつたつて」の意か。」、鷺と別鳥で、紫鷺だつたら、一層、別鳥だ。

「やぶちゃん注」：「アルデア・プルプレア（紫鷺）」ペリカン目サギ科サギ亜科アオサギ属ムラサキサギ *Ardea purpurea*。当該ウィキによれば、『アフリカ大陸、ユーラシア大陸、インドネシア西部、シンガポール、スリランカ、日本、マダガスカル』に分布し、『夏季にユーラシア大陸西部』、中国『北東部などで繁殖し、冬季になると』、『アフリカ大陸などへ南下し』、『越冬する。ユーラシア大陸南部、マダガスカルなどでは周年生息する。日本では、亜種ムラサキサギ』 *Ardea purpurea mantensis* 『が八重山列島に周年生息する（留鳥）が少ない。西表島、石垣島で繁殖記録がある他』、二〇〇三年には『池間島の池間湿原で繁殖が記録された』、『また』、中国『北東部などで繁殖すると考えられるものが、春・秋の渡りの時期に、主に西日本で見られることがある』。全長は七十八〜八十センチメートル、翼開長は一・二〜一・七メートル、体重は五百グラムから一・二キログラムある。

『頭頂から後頭は黒い羽毛で被われ、後頭の羽毛』二『枚が伸長（冠羽）する。顔や頸部、胸部は褐色の羽毛で被われ、顔から頸部にかけて黒い筋模様が入る。頸部上面や胴体上面は灰黒色の羽毛で被われる。また』、『青みがかつた灰色や赤褐色の長い羽毛が混じり、紫みを帯びる。体側面や脛は紫がかつた赤褐色の羽毛で被われる。種小名 *purpurea* は「紫の」の意で、和名や英名と同義。腹部や尾羽基部下面（下尾筒）は黒い羽毛で被われる。雨覆の色彩は灰褐色で、初列雨覆や風切羽上面の色彩は灰黒色』。『嘴は細長い。嘴の色彩は黄褐色で、上嘴は黒い。後肢はやや短い。後肢の色彩は黄褐色で、趾上面は黒い』。『卵は長径約』五・七センチメートル、『短径約』四・一センチメートル。『幼鳥は全身が黄褐色や赤褐色の羽毛で覆われる。後頭に冠羽が伸長せず、顔から頸部にかけて入る筋模様が不明瞭』とある。但し、熊楠は『支那名「天果鳥」、天津で「花雀子』』と記すが、検索をかけたも、この漢名は今に生きていない。

「ペルセア樹」クスノキ目クスノキ科ワニナシ属 *Persea* がある。英文ウィキの「ワニナシ属 *Persea*」のページを見ると、本属が暁新世の西アフリカに起源を持つこと、今日でも多くの種がアフリカに生き残っていることあるので、エジプトにあってもおかしくない。なお、すっかり本邦でもおなじみとなったアボガド（*Persea americana*）は、御覽の通り、本属である。

「金色の雀鷓つみ」タカ目タカ科ハイタカ属ツミ *Accipiter gularis*。本邦にも棲息する猛禽類である。詳しくは当該ウィキを見られたい。」

次に、鷲、子を産んで、その子、日を視て、目がくらめば、鷲の生活に適せず、として、自ら、其子を殺す、という話は、西暦二世紀に書いたエリアヌスの「動物の天性」第二巻二六章に出づ。

成る程、かく列し来れば、鷲と、日、又、火を連ねた話は、随分多い様だが、是は、故さらに、鵜の目鷹の目で、大穿鑿をしたからで、凡て、火と、日は、熱の根本で、熱が有ゆる動植物の生存に、必要、大なれば、何の生物でも探索すれば、必ず、多少、日や火に聯ねられた譚は、ある筈。而して、日や火に、尤も顯著な關係あり、と見えたフェニクスが、デ・カイ氏の所見と違ひ、全く、鷲でないこと、埃及學専門の大先生共の口から揚つた以上は、鷲と、日や火の關係を、喋々して、鷲石の諸功驗を、日や火に歸する論は根據を失ふ。而して、鷲石は、いかにも酸化鐵より成るが、上に第一篇に引いたスブランとチエルサンの「支那藥材篇」に云た通り、鷲石の酸化鐵は、「沼鐵」スラン 抔いふ水酸化鐵で、磁石如き純酸化鐵でない。其を、明かに火の作用に基くを示す抔いふは、輕舉も、又、甚だしい。「本草綱目」十に、時珍曰、按別錄言、禹餘糧生三東海池澤及山島一、太一餘糧生三太山山谷一、石中黃出三餘糧一處有レ之、乃殼中未レ成三餘糧一黃濁水也、據レ此則三者一物也。〔時珍曰はく、按ずるに「別錄」に言ふ、『禹餘糧は東海の池澤及び山島に生ず。太一餘糧は太山の山谷に生ず。石中黃は餘糧を出だす處に、之れ、有り、乃ち、殼中の未だ餘糧と成らざる黃濁水なり。』と。之れに據れば、則ち、三者は一物なり。〕三物、みな、鷲石だ。そして、海・池澤・山島・山谷、黃濁水、何れも、水に縁なきは、なし。「大英百科全書」十一板第十六卷にも、鷲石は水酸化鐵の由、見ゆ。去ば、鷲と、日や、火を連ねた談が多いからとて（和漢等に、そんな談、無く、印度には上に引た、金翅鳥王が日神の馭者と共に、一卵より生まれた譚あるのみ。それも精しく言ば、金翅鳥は鷲に近い者で、學名ハリアスツル・インヅス、英語でブラーミニ・カイト、又、ボンヂチェリ・イーグル、鷲とも、鳶とも、見えるのだ。眞の鷲族の者でない）、鷲石を、『鷲が日から持つてきたと古人が信じ』抔は、丸つきりの妄斷ぢや。

「やぶちゃん注」：『「本草綱目」十』は、「禹餘糧」（以前に述べた通り、「糧」は「糧」に同じ。以上の本文でも、「糧」ではなく、同書原本の表記で示した）の項ではなく、そのすぐ後に続いて載る「太一餘糧」の項の「集解」の一部である。「漢籍リポジトリ」のこちらの[032-13a]の影印画像で校合した。

「ハリアスツル・インヅス」タカ目タカ亜目タカ上科タカ科トビ亜科シログシラトビ *Haliastur indus*。英名 *Brahminy kite*（インドのカーストの最上級に位置する「バラモン階級所縁の鷹」の意）、古い言ひ方で *Pondichery eagle*（インド南部の地方「ボンヂチェリの鷲」の意）も英文サイトで見つけた。』

○雄鷲石 一八七六年板、ウォーター編纂、サウゼイの『隨得手録』第一輯五二七頁に、チャーレス一世（十七世紀）の時、バートレットなる人、多くの財寶を抄掠「やぶちゃん注」略奪。」された内に雄鷲石一つあり。曾て、一醫士、三十金を以て之を買んと申し出

た、とある。是は、既に第一篇の初めに述べた如く、プリニウスが鷺石は毎に雌雄二つ揃ふて鷺の巢にあると云た、その二つの内の雄石だろうか「やぶちゃん注…ママ。」。はた又、一六四八年、ボノニア板、アルドロヴァンジの「礦物集覽」第四卷五八章にみゆる、雄鷺の體内より見出された石だらうかと、大正十二年八月二十五日の『ノーツ・エンド・キリス』一五五頁へ質問をのせたに、誰も答ふる者が今日迄ない。

○偽鷺石 一七四六年板、アストレイの「新編水陸紀行集」第三卷三七三頁に云く、喜望峯地方で、小石原や澤邊に偽鷺石あり、ほゞ圓く、栗の大きで、中空に砂等を満てたり。其外面はサビで被はる。此物を大奇品として他邦人に贈る、と。是は、日本で、所謂、「饅頭石」の如く、石の中に、土砂斗り藏めた麤末な品で、日本で所謂、「スズイシ」程、石中の石が堅くて、遊離し居るものを、「眞の鷺石」、さもない者を、「偽鷺石」と呼んだのだろう「やぶちゃん注…ママ。」。(大正十五年九月十九日朝十時稿成る。)

「やぶちゃん注…最後に私は所持している「[南方熊楠を知る事典](#)」(一九九三年講談社現代新書刊)のウエヴ・サイト内の原田健一氏の「[鷺石考／孕石のこと](#)」の記事をリンクさせておく。」

南方熊楠「鷺石考」(『續南方隨筆』所収・正規表現版) 藪野直史オリジナル注附 完